

「存じません、そんな事は」

「ぢやア寢惚けるんだな」

「大方さやうで御坐いませう、どれ、お掃除でも、良人、塵埃が立ちますから庭で運動でも遊ばせ」

「や、聊か御意に觸つたやうだな、さらば暫く其鋭を避けて遁け出さう、恐るべし恐るべし、例の鐵砲と女房と飛道具だ、うかく中てられちやア堪らない」

「餘計な事を仰しやらずに早く、早く起つて戴きませう」

「いよく以て形勢一變、穩和ならざるの兆ありだ、遁走々々」

其四

例の黒田が二十八圓を三十圓として堅く封ぜし上に、たゞ無名氏寄附の五字を書し、

その翌朝これを本所の養育院に投げ込むや否、辻車を備うて築地三丁目の春洋館、もはや既に捨てたる男ながら前夜また思ひ直して今朝こゝに訪へば、さてもく素早い奴、きのふの午後一時ころ俄の所用ありて静岡邊へ旅行せりとの遁け口上を残りぬ、しかも一月以上は歸京せずとの豫防策まで張り置きしところ、いよくその本領を現はして猶更、心憎し、

かの紙入に名刺を入れ置きしは彼奴の姿を隠せし所以、近縣旅行か室内旅行か知らねど、もはや長くは此家に居るまじき奴、いづれ宿を換へ巢を變へて、また外に人知れぬ罅を定むべき奴、この上は訪ふに及ばず、わざく探すほどの奴でなしと、そのま

ま去つて濱町へ車を急がせぬ、柳島に引き移つてより一月餘り、をりく立寄れども、たゞ一時の談笑に止りて、いまだ我計畫の片鱗だも示さざれば、今日こそ幸ひ岳父が日曜の閑に乗じて聊か抱負の

一端を吐露せん、由來幾何の風雨波瀾を漕ぎ來つて空想理論の外に今日の港灣を得たる半白の實驗上、或は我ための羅針盤たるべしと、門前に車を乗り捨て、賃錢を與へながら、ふと見返れば、や、黒田健次め、のこくと門内より立出でぬ、
 臥龍梅の不意討に一驚を喫せし黒田、わづか一日を隔てし今また此處に二度目の不意討を喰つて、しかも近縣旅行と欺きし其川上が岳父の家より出合頭の周章狼狽、すつと摺れ違つて門外へ遁け出すべき筈の奴が踵を返して門内へ遁け入りしかば、もはや袋の鼠、釜中の魚、川上三吉は悠々として網を張るが如く左右の大手を擴けて歩み入りぬ、

進退こゝに谷りし黒田は絶體絶命、逆も遁れぬ例の糞度胸を据ゑて立關前に立往生しながら、滿面の苦笑ひ、啼き損ねたる猿に似たり、

「おい黒田、貴様ア静岡から、いつ歸つた、一月以上の豫定で、きのふ立つたばかり

ぢやア無いか、そりやア備置いて一昨日の看梅、意氣なこつたね」

「いやはや、言語道斷の次第で、重々の失敗、何とも申譯のないこつた、汗顔の至極・面目玉も膽魂も一時に潰れて仕舞つたよ、は、は、は、」

「何が呵しい、恐れ氣もなく人並に満足な笑ひ聲が出るぢやアないか、しかし魂魄の脱殻に對つて人事を談ずるの用はない、たゞ一言、簡單に答へろ、全體こゝへ何しに來たのだ」

「どうも君、さう曲もなく一喝の下に」

「曲もない、は、は、は、いやに淨瑠璃の文句めいた妙な言葉を使つて來たな、曲も柴折もあるもんか、只うろくと此家へ舞ひ込んだ用をいへ」

「その用は君、外でもないよ、實ア一昨日の馬鹿さ加減を睨まれて以來、流石の蛙面馬耳郎も腸を煮返さるゝ心地で、どうも氣が濟まないから、せめて君が目今の住所

を聞いて、謝罪かたぐ、まさか外觀の醜體ほどでもない云々の内容を辯疏せんがため、ちよいと當家の下女に御館の問ひ合はせ」

「この狸奴まだ正體を現さないな、それほど乃公の住家を聞きたい奴が、なぜ靜岡へ急行したんだ、貴様の考量ぢやア一片の郵便を投じて乃公を誤魔化すための町名番地を問ひに来たんだらう、汐入村の立退狀一札以來、どうも貴様ア妙な癖があつて、おのれの面の出せない時は必ず駄文を弄して一時を塗抹するの悪習がある、まるで烏賊か蛸のやうな奴だ、叶はなくなると忽ち墨を吹いて遁け出すからなア、しかし虚欺にもしろ外觀ほどの醜でない申譯がありやア慰みに聞いてやるから、まア這入れよ」

「や、流石に君だ、良工は寸木の朽ちたるを捨てず」

「黙ッて這入れ、ちよいと甘味を見せりやア、すぐ舐めてかゝる奴だ、いくら良工で

も骨まで腐りぬいては細工が出来るもんか、只ぶち割ッて薪にでもするのさ、は、

は、は、は、

立關前の立談、はやくも聞えて障子の影まで出で来りし下女も、何とやら差控へて暫しの無言、やうく川上の入り来るを見て慇懃に迎ふれば、靜に首肯いて優しけの微笑を含みながら、脱いで手に持てる帽子を渡しつゝ、

「今日は好い天氣だな、時に、居られるかね」

「はい、も一歩お早く入らッしやれば宜しう御坐いましたに、幸ひ日曜で閑暇だからと仰しやッて、龜井戸の梅を御覽かたぐお宅の方へ」

「む、さうかい、ぢやア兎も角、應接所へ茶と火鉢を持って来てくれ、菓子なンざア入らないよ、もしあれば乃公が喰ッた分にして和女達、どしく喰ッて仕舞へ、お土産の代用だ、は、は、は、貧乏世帯を持つて以來、吝で恰憫で、うまくなッたらう」

圓轉滑脱 洒々落々として他を笑はせ自己また高笑ひながら、應接所に入れば、黒田
おもはず横手を拍ツて、

「うまい、實に巧い、ごつくととして萬事どこまでも野暮のやうだが、ちよいと一點
得もいはれぬ愛敬あつて加之も卑しからざるところ、いかにも君だ、その呼吸で當
家の親子がして遣られたんだからなア、たまらない理由さ」

「また、すぐと馬鹿口を叩き出すよ、さア茶でも飲んだ上、まさか外觀の醜ほどで
も無いとかいふ云々の内容を語つて見ろ、しかし待てよ、徒らに饒舌らしちやア際
限がなくつて虚欺が多くつて要領を得ない先生だから、乃公の方で簡單に一二の質
問を出さう、例に依つて無用の駄辯喋々は眞平だ、たゞ明かに潔く立派に答へる、
また答ふるの必要なしといへば問ふの必要も無いこつた、宜しく無言のまゝに去る
べし、もし答へるなら男らしく、ぬツと大膽に語つて仕舞へ、どうだ答へるか去る

か」

「答へる、これが倉橋か上田の前なら随分、無言で去りかねもしないが、君にやア答
へるよ」

「そら、すぐに無用の駄辯が出る、何故また上田や倉橋なら無言で去るんだ」

「は、は、は、あの君子等には通じないところがあるからさ、つまり答へては却つて其
悲憤を増すの恐れあるからさ、先方より此方の情に於て忍びないからだ、氣の毒で
堪らないからだ」

「いや、怪しからん事をいふ奴だ、あの君子等たア何のこつた、しかし餘事は儲置い
て、おい黒田、三千五百圓の金、もう幾何ほど費ツた、いくらほど白癡の代を拂ツ
た」

「こいつア酷い、いくらほど白癡の代を拂ツたに至ツちやア罵り得て妙だな」

「餘計な事いふに及ばない、三千五百圓さらに一文なしと言ったって驚く川上でないから、安心して答へろ」

「さればさ、まづ今日のところで千六百圓ばかり、無論、一昨日の君に盗まれた分も込めてだぜ」

「や、此奴め、同じこつて間違つたとか出したとか言へば兎も角、盗まれたとは何事だ、貴様が慌て、狼狽へて乃公に渡したンぢやアないか、しかしあの金は善い事に費つて遣つたから喜べ」

「有難いな」

「は、は、は、は、全く有難いこつたぞ、ところで千六百圓、皆あの化物にか」

「化物、化物とは」

「あれが満足の人間と思へるか、あの梅見に連れて居つた女に千六百圓を吸ひ取ら

れたかといふんだ」

「然り」

「然り、たゞ一言、然りとは面白く答へたな、どういふ工合に巻き上げられた、否、

まだ残金を巻き揚げられつゝある最中だらう」

「いや、儲そこで外觀の醜と比較して貰ひたい内容云々の辯疏必要だ、なるほど彼女がため既に費したところ千六百圓ほどだが、もはや鏝一文も断じて巻き上げられない、況や巻き揚げられつゝある最中どころか、事に依れば此方から巻き上げてやらんとする序幕だ、また一口に千六百圓といふもの、そのうち三百圓前後は僕が身の調度と日々の小遣で、彼女がため行方も知れず空に消えた煙のやうな金が凡そ三百圓、つまり千圓は物に變つて現存してるから、まづ實際の空費は多くて四百圓ぐらゐるだね、しかし其四百圓また考一考すれば、物になつた千圓の運動費で、しかも

千圓の物が次第に依つて幾何になるか判らない、つまり居据り固定の千圓でないから」

「む、なか／＼うまい勘定だね、聞くなり、笑窪の一滴が幾何といふ當世化粧のモンを殆ど無價で自由にして加之も其上に金を儲けようといふ御商法らしいね、千圓は物であると稱するなア彼女を入れる家でも買ったのかな」

「えらい、上田や倉橋には通じないが、打明けて君に答ふる所以こゝにありだ、中らずと雖も遠からず、まづその御近處だ、いかにも千圓は彼女を容るゝの家を買つた即ち千圓を投じて諸式一切その商賣に必要な小道具まで据ゑ付けの代價三千八百圓の家を買つた、いふまでもなく二千八百圓の抵當に叩き込んでだよ、まだ僕が懐中に餘すところの現金千八百餘圓こりやア容易に出さない、また彼女にも知らさない、いは、萬一の用意、破れて討死しても忽ち蘇生つて更に二度目の旗揚料だ」

「なるほど御本人みづからの仰せだから間違もなからうが、随分、際どい藝らしいな、ところで全體あの女は何物だ、藝妓にしる地獄にしる、まさか塵埃溜の中から湧いても出まいから、それ相應の素情來歴といふモンがあるだらう」

「は、／＼、／＼、なか／＼君も口に毒があるぜ、地獄とは酷いね、あれでも人間のうちだよ、蚯蚓や蟋蟀ぢやアあるまいし、塵埃溜の中から湧いて出て堪るモンか」

「いや湧いて出ないとも限らない、往々あゝいふ動物は日光の届かない社會の暗黒面に呼吸をしてる奴だからねエ、しかし何處の塵埃溜から全體どういふ工合に這ひ出した女か、何とか名もあるだらう、どのくらゐ年數を経て、また如何なる場合いかなる理由で貴様が餌食になつたんだ」

「いよく／＼酷い、ます／＼出でて激烈だ、流石の僕も君には殆ど閉口するね、ありやア君、藝妓でも地獄でもない、つまり僕が亡妻の再生だ、なるほど本人は去年の春ま

で新橋に藝妓をして小川屋の小米と呼ばれた女、あけて今年が二十六、うまれは権現様以来の江戸ツ子と稱した生ッ粹の勇み肌から出たもんだが、その両親は早く死んで仕舞ッて長唄の師匠をして居た伯母の養女となり、その伯母も五年前あの世に見送ッて今ぢやア一人ほッちの我ま、もんで、實は藝妓を廢止る二年前から自前にしてくれた田舎紳士の禿頭が蒼蠅く付き纏ッて居ったさうだが、いよく其奴にも去年の夏、づどんと貳鐵砲を喰はして、もはや誰に氣兼ねなしの上、無論、金は無いが四五年の間の全盛で腕に糾をかけて出来た身の調度の雜物を、うんといふほど持つてる女だから、當分まづ暢氣に遊び半分、幸ひ春洋館の鼻アが矢張り元は同じ穴で、しかも姉妹同様にした因縁で、手傳に來て居ったのさ、ところへ僕が、ふと下宿したもんだから、つい、は、は、は、しかし彼女を見たのは春洋館が初見でない、實は先々月、まだ君が當家に居った時、僕を呼んで大に奮勵せよと諫め僕ま

た心機一轉を誓ッて上田の家まで立歸る途中、あの兩國橋で、妙な事をいふやうだが君、死んだ妻に出逢ッた、どうしても他人たア思へない、尙たも尙た不思議に尙た奴よ、殆ど再生だ、こりやア決して僕が心の迷ひでない、願はくは能く亡妻を知る上田をして一見せしめたいくらゐだ、いかな上田でも驚くに違ひない、世の諺に瓜兩斷といふが、ありやア瓜を兩斷に割らず其ま、だ、しかし君に前途を誓ッて奮勵一番の舌いまだ乾かざる門外一步の途端だから、咄この惡魔と叫ぶや否、懷中の三千五百圓その銀行の預金帳を兩手に固く握んで一散に馳せ歸ッたが、さて惡魔この僕に執着いたもンか、再び春洋館で邂逅ッたから君、多少は察してくれ」
「は、は、は、のろけは其邊で澤山だ、ところで亡妻の再生と稱する其女を今、どういふ工合にしてあるんだ」
「つまり千圓を投じて二千八百圓の抵當に入れた三千八百圓の家、こりやア烏森の殘

月と言った待合で、煙草盆から坐蒲團の末に至るまで一切そのまま譲り受けて、やはり待合家業さ、後楯は春洋館の唄アで、彼女は采配を取って寄せ来る敵に對ひ僕は只ほんの餘所ながら人知れず聲援を與へるばかりで、これが決して本意でなく目的でなく、いはゞ志の百分一も脳味噌の千分一も注いで居らない證據には、二千圓近くの金まだ依然たりだ、もしこゝで彼女が反旗を翻せば、民事上の法律に依つて千圓だけの物は確と取返すべき用意ありと雖も、なアに高が女を相手に訴訟を起すやうな馬鹿は演じない、そのまゝ死んだ貞女の唄アが面影ある女へ呉れてやる覺悟さ、もしまた罪な家業だが、うまく繁昌して其間に嫌な面倒さへ起らなきやア、譽められたこつてもないが、わづか千圓で確固に十年や十五年の衣食に贅澤を盡して、また別に僕が本領の仕事をする心算だ、汐入村に苦學十年の一味中こんな奴の出たなア定めて慨歎の至極だらうが、どうか君、大目に見遁してくれ、強ち頭の

天邊より足の爪頭まで化物の餌食になつた結果でも無いからねエ」
「いや、大略は判つた、しかし惜しいもんだよ、いよく君も片脚は泥の中へ突つ込んで仕舞つた、つまり世にいふ朝風呂丹前金火鉢の仲間に落ちて仕舞つた、なアに一時の洒落だ本領また別にありといふだらうが、否、今も現に言つてるが、さて人生さう巧く兩刀は使へるもんでない、もし持てば十中の八九、矛と盾だ、いまだ悉く墮落しないと自稱する證據の二千金、なるほど、今なほ君が懷中に依然としてあるに相違なからうが、そりやア懷中にある今の事を君が今いふ理由で、決して他日の有無を證するに足らない、その化物の魔力に吸引せられて遠からず懷中より呻り出す事があるだらうと考へるな、たとひ欺されずとも君の方から欺されてかゝるよ、たとひ欺されてかゝらずとも出さざるを得ざる場合が必ず来るよ、君が懷中の金を出して仕舞つた後に始めて或は其家業が成就するかも知れない、知れないが成

遣ッて見せる、ところが君は君たりだ、もはや何も言はないが、たゞ一言、おい黒田、羽織破戸漢になるなよ、黒の五つ紋を着た時は仙臺平の袴を穿け、宜いか、また破戸漢になるなら盲縞の腹掛をして後、ごろつけよ、善悪ともに卑怯な事をするな、また以後一切、倉橋への文通と上田や吉田に面を見せて氣を揉ますな、乃公のところだけは宜い、いつでも来るなら来い、もし乞食になりやア残飯餘汁を呉れてやるし、犯罪をして来りやア乃公が付き添ッて潔く自首もさせてやるから」

「そりやア君、あんまり酷い事をいふぢやアないか、乞食、犯罪に至ッては君、いかに黒田健次が墮落するにしても」

「おい、黒田、怒ることッてないぜ、今、乃公が言ッた事を能く味ッて見ろ、寧ろ感謝すべき言だ、十餘年來、朋友と思へばこそだ、牛の角を矯めて殺すやうな川上でない」

「なアに怒る理由は無い、ないが君、聊か薬が利き過ぎたやうに思ッからさ」

「どこに怒る理由があるもんか、また尋常一般の病人に對する薬石で效のある奴か、通例の人間なら死ぬくらの分量を多く盛ッても效能が薄い君だ、こりやア談話だ、がね黒田、ある盗賊の親分が覘ッて置いた藝妓の家へ子分の新參盗賊を差向けたさうだ、すると此奴一品でも多く盗んで親分の氣に入らうといふ料簡で、その藝妓の白河夜船を僥倖、ぐツすりと脊負ひ込んで無事に遁け歸ッたところが、親分その盗品を點檢して座敷着の三枚重ねに小皺の寄ッたのを指さし、こりやア箆筒の中ぢやアあるまい、どこにどうしてあッたと聞いたから、子分は得意顔で枕頭に脱ぎ捨ててあッたと答へるや否、ぐわんと横面を喰はせて、この野郎め逆も無効だ、いくら修行しても大きい盗賊にやアなれねエ、なぜ商賣道具を一品だけ残して来ない、あすから其藝妓は何を着て座敷へ出る、物は奪ッても翌日に喰ふ米櫃の米と人の職は

止めて来るもんでないと吐鳴ったさうだが、ちよいと面白い談話だね、つまらないこつたが君、なか／＼味ひのある消息だぜ、はゝゝゝ」

「なるほど乞食に盗賊か、とても聖賢の談ぢやア通じないといふ點から持つて来たんだな、しかし理に於ては面白く聞いた、待合家業で人を剥ぐにしても人を殺すな、わざ／＼投げ込みに来る金は取つても其奴を追ッかけて家まで倒すなどの御教訓だね」

「よせと言つても廢すまいから、せめて僕の祈るところだ」

「よく會得した、ぢやア今日は、これで」

「むゝさうだ、乃公も用があつて来た岳父と出違つて、しかも不在へ往つたといふから、すぐ歸る筈を何のこつた、つまらない餘計な徒勞口を叩かされてよ、はゝゝゝはゝゝゝ」

「いや決して今日の君を徒勞口にしない、泥に落ちてても泥は香まないから」

「實際その覺悟さへありやア、兎も角、やるだけの事を遣つて見るが宜い、腹に香まず脚に塗れた泥なら、また洗へる時もあるだらう、しかし今昔の感に堪へんなア、夏は終夜の藪蚊に責められて書を読み冬は布子一點寒曝しの空腹を抱へて議論を戦はした連中から待合の御亭主を出すたア思はなかつたよ、人事茫茫、實に測るべからずだ、なれど決して止めない、やれ／＼、大に遣れ」

「さういはれると苦しくつて堪らないから、どうか此邊で歸りたいもんだ」

「はゝゝゝ、急に弱くなつたな、さア遠慮なしに歸るが宜い、乃公も歸るんだ、しかし門前ぐらゐまで同伴に歩まうよ、十餘年來の友達ぢやアないか」

「一言なし、徹頭徹尾、今日は酷くまるられた」

「ところで静岡行は全體どうなつたんだ、日延か、但しは停止か」

「やアどうも堪らない、窮迫追撃、餘すところなしだ」

「なアに、まだ餘してるとよ、小川屋の小米といふ藝名は聞いたが、本名を聞かないぜ」

「いよく降参、迎も我等風情の企て及ぶところでない、よく倉橋や上田は僕を以て口に毒ありといふか、どうしてく僕に毒舌なンぞア罪の軽い優しいもんだ、君の舌鋒に至っては敵の急所を覘つて皮を破り肉を裂き骨の中央を貫くんだからな、しかも残忍酷薄なかく一氣呵成に殺してくれない、或は踏んだり蹴ったり差し揚げたり、さんざ御慰物にした上の弄り殺しだ」

「は、は、は、相手によるよ、一昨日のやうに化物携帯の時は無言攻撃だ」

「いや僕も随分、盲蛇で凡そ大抵の事には驚かないが、あの時ばかりは實に面くらつて狼狽へたな、まして今年この歳になるまで無言の責苦に逢つたなア始めてだ、あ

とで彼奴のいふ事が宜い、あの方は欲の深い啞で御坐いますかと、は、は、は、たゞの啞と違つて慾の深い啞は面白いね」

「畜生、ふざけた事をいふ奴だな、けしからん阿魔だ、しかし貴様のこつたから、うんさうだぐる吐いたらう、また其上に何か尾緒を付けて饒舌ツたらしいぞ、惚れた女の前で自己が器量を下げた苦しませ、貴様の性として黙つて居る道理がない」

「ど、どうして、そんな馬鹿な事を、ありやア乃公が兄分の男で、なかくの洒落もンだから、洒落に啞の眞似をして洒落に紙入まで巻き揚げたと、かうでも言はなけりやア僕の立場が無かつたさ、は、は、は、」

「どうでも宜い、同じやうな雌と雄が囀るこつから、は、は、は、」

「雌と雄」

「さうさ、夫婦ともいへないぢやアないか」

「これで御免蒙る、うかくすると何をいはれるか知れない、さよなら」

「身體を大事にしろよ」

「ありがたう」

其五

いつしか梅も散りて藤の花となれば、暫し途絶えし人の躰音ぞろくくと俄に盛り返して、また柳島の近邊より龜井戸の天神境内に俗物の群をなしぬ、
 迎も後世の紫雲に乗れぬ奴が池水にうつる藤棚を見て、現世の紫雲に乗ったる心地、
 歸れば忽ち火宅の宿なれど、かうしたところは一日の極樂蜻蜓、羽を擴けて縦横無盡
 に狂ひ舞ふ歡語笑聲の音響、幽に遠音の藪蚊に等しく聴きながら、衣香扇影を餘所に

して、寒林枯木を描くが如く、この四五日以来さらに一室を出でずして頻りに筆を採る川上三吉、そもく何をかする、

文を賣つて世を渡るにあらず、空想空理に依つて名を得んとするにあらず、無用の閑人こゝに無用の閑文字を弄して自ら慰むにあらず、正に是れ半生の腦裡より絞り出せし一片の抱負、もし人間の糊付細工の杓子定規に當て、濟度せんとする者の眼に觸れしめば、おもはず顔色を失うて悪魔と罵り外道と叫ぶべく、もしまた浮世を團子細工の紅筆模様を彩つて作り上げんとするものより見れば、あつと驚き呆れて狂と呼び愚と稱すべく、これを通常一般の知人間に示せば忽ち恐れ戦いて交際を絶たるべく、これを故郷の親戚に送れば忽ち卑しめ捨てられて再び國に歸るを得ざるべく、これを死文死法の下に衣食せる俗吏の耳に聞かしめば、その出入に必ず秘密探偵の潛行追窮を免れざるべし、

されど近處合壁もなき借屋住居の奥、五十坪に足らぬ庭の樹木に對ひ六疊の一室に閉ぢ籠りて、三尺の机に五尺の身を寄せ、しかも八寸の筆と一帖の紙とを出でざる寂寞孤影の今は、さらに何の事なけれど、これを世に示すと示さざるとの間一髪は、正に川上三吉が死生の境なり、

しかも其死や空しく屍となり骨となるべき死の易きにあらずして、生きながら生涯を世に捨てられ人に棄てられつゝ、社會の人外に葬らるべき苦悶轉輾の死なり、また其生や直に效をあけ名を成すの易きにあらずして、さらに前途幾何の勇往奮進、あらんかぎりの力を盡して猶かつ十中の一二を期すべき苦戰難闘の生なり、直線を二點間の至短なるものとは家に歸つて母の膝に睡る十歳の小學生徒も答ふるところ、大道の中央を走ると横町の廻路を行くとは猫の髯を撈つて叱らるゝ丁稚小僧も知るところ、されば其まゝの懷手に當世紳士の檜舞臺を譲られて加之も美人の戀塔に

太平無事の世を送るべき川上三吉、そもく何を苦しんでか成敗ともに利害得失の數に合はざる愚を呈せんとするか、そもく何がため殊更に安を去り逸を捨て、勞を取り苦を願ふの狂に投ぜんとするか、まして百代の知己を待つべき哲理にあらず現實の効果を卑しむべき宗教にあらず社會の多數を適とする政見にもあらず神韻の微妙を旨とする文學美術の類にもあらずして、何事ぞ正に是れ紛々たる俗中の最も卑近なる大俗事にあるとすれば、人に過ぎたる苦學十年の功を積み來つて久しく飛ばず啼かざりし深沈自重の好漢その川上三吉は、憫れむべし十歳の學校生徒に及ばず丁稚小僧に如かざる一種の愚となり狂となり畢んぬ、されど世には愚に似たる智あり狂に等しき眞面目あり、俗に似たる雅あり野卑に類せる達觀あり、鬼に似たる佛あり小人に類せる大物あり、また世間一般の理に合はざる天下の眞理あり眼前普通の事にあるべからざる正當の事實あつて、これを行はんとす

るものは只それ鐵の如き心と斗の如き膽と一代の毀譽褒貶を空しうせる意氣の快とを要す、滔々たる當世今日の徒らに人臭き肉塊物が與り知るところにあらずとは、川上三吉が無言の大聲疾呼、をりくは筆をどめて我たゞ獨り冷かに笑ひつゝ、庭の梢に餌を争ふ群雀の集散離合を打守つて竊に首肯きぬ、

をりしも襖を隔て、妻の芳子と語るもの、やがて高く笑ふ聲は上田力、固より腸の底まで打明けて隔心なき刎頸の友ながら、猶いまだ稿を脱せざれば慢然一讀の下に事實を誤らるゝの恐れあり、まして彼が如き單純潔白の男に物の全形を備へざる前、無用の驚歎あらしむるは情に於て忍びざるところと、俄に草稿を取つて手函のうちに秘しながら、

「おい芳、上田ぢやアないか、なぜ早く知らさない、さア這入ツた〜」

「いや、例に依つて用のない頗る暢氣なお客様だ、何か書くものがありやア一切お構

ひなしに書いてくれ、今や正に細君と身に取つて忽せにすべからざる浮世談の討論まッ最中、しかし人間に遠い恍けた仙人と天女に近い初心な奥様との世帯談話で、どうやら實行が出来さうも無いらしいよ、は〜は〜は〜」

「なるほど、お互に油断のならない世帯持だからなア、たとひ出来ても出来なくつても、それほどの心掛がなくツちやア不可ない、ところで先づ這入れよ、ちやうど今、手が空いたから」

さらば聊か清閑を侵さうかと、襖を引き開けて現れし上田の顔面いとゞ布袋に似たる微笑を含んで、借屋住居の鴨居に五分刈の頭を摺り付けながら全身いづこに罪もない體、九尺四枚を左右に開かねば入りかぬる大兵のツそりとして、自然に踏み鳴らす床板の音ぎゆうと鳴る毎に思はず山の如き兩肩を縮め、我身を持って餘して靜に軽く座に着く風情、いつ見ても一種無言の愛敬をこぼしぬ、

「今日は上田、藤でも見に来たのかね」

「どうして〜、近來わけて嗅アの嚴なる、小兒でも連れ出せば兎も角、それさへ萬事に小廻轉の利かない父御といふ理由か五町以外は禁足だ、まして乃公たゞ一人、のこ〜花見なンかに出さないさ、只その命令的に依つて當家お伺ひのためよ、はは、〜しかも時間の制限があつてね、午後四時半まで、つまり僕のやうな喰ひぬけが人出入の尠い家へ不意に押し掛けて夕飯の番狂はせをするなといふ御意見らしいわい」

「は、〜、〜しかし夫婦ともに能く其調和を得てるから結構だ、實に伉儷だ、さらに一點の飾りツ氣もなく互に眞を失はざるところ、むしろ君は人生の幸運兒だ、ちと露骨の言だが、君の如き俗を離れた潔白の性に世間普通、もしくば其以下の所謂る妻なるものを持つて見ろ、泣くぜ、人知れぬ男泣きの涙だ、糟糠の彼妻を堂より

下して居つても宜い、たゞ心に忘れず念々さらに感謝すべしだ」

「いや實際だ、たゞ一子あるがため母と呼ばれ父と呼ばれて居るが、彼を妻とし我は良人たるの資格これ無しの厄介物だ、いはゞ圓滿にして慈善なる一女の下に生涯の食客してる氣だよ、は、〜、〜」

「は、〜、〜相變らず面白い事をいふね、もし其言をして例の黒田が口より出でしめば鐵拳を喰はしても宜いが、さて君の口より出るから殆ど愛の至情だ」

「や、黒田といへば彼奴、その後の消息さらに無いが、全體どうしてるだらう、朝夕に面を見合つてると言々句々いち〜癩に觸つて堪らない奴だがね、また去つたまま閨として音なくンば聊か心配してやりたくなるよ」

「なアに君、うツちやつて置け、あんな奴だ、いくら此方で心配してやつても無効だ、どうせ金のあるうちは太平樂の腹鼓、鼻唄でも呻つて酒でも酔ひ喰つてるだらう、

しかし惜しいもんだよ、もし彼奴が散漫の脳味噌をかためて出處進退に一定の歩武あらしめば殆ど得易からざる才物だがねエ、とかく萬事が不節調で不可ない、結局あゝいふ男は荒れたる野獸と一般、餌に盡き身は窮して勢ひ谷ツた後、さらに頭を伏し尾を垂れて来るまでは手も着けられない、するだけのことをさした上で無きやア藥が利かないから、まア黙ッて捨て、置くさ、飛ンで跳ね廻らして置くが宜からう」

「なるほど、さうだな、ところで吉田、ありやア君、どうする、定めて本人の考案もあるだらうが、いよく今年で例の法學校も卒業だ、昨日も僕の家へ突然、やツて來てね、優しい男よ、自分が寄宿舎の外で牛肉の一鍋も喰ふ錢がありやア、いつも子供に菓子か玩具を買ッて來るが、少しも無駄な口を聞かずに、忽然また出て行く體、如何にも宜いところがあるよ、わけて君に宜しくと言ッたぜ、決して遠路を厭

ふ理由でない修學の身で無用の訪問は却ッて君の意に反くと思ッてるらしい」
「いや、さうだらう、曾て僕は固く禁じてあるから、つまり吉田は性行その他の萬事一切すべて、黒田の正反對に出來た男だ、ところで彼をして法學生にしたのは一見ちよいと事に適しないやうな感もあるがね、さて我々の如く徒らに漠然たる苦學十年ぢやア逆も今日の世の中に無効だ、むしろ多少の其人に當らざるところありとも専門の業に限ると思ッて斷然、やらした理由さ、のみならず僕は吉田をして學校を出るや否、直ちに衣食のために權利義務を叫ばしたくない、願はくは更に猶あの上を大成して、單に立派な其道の學者にして見たい、およそ今日の學生なるもの、いづれも道のために深く飽くまで學ぶ人間がない、殆ど衣食のために試験の數を多く受けるやうだ、勿論、たゞ單に學者ばかり高い鼻を押し合ッて出ても困るが、また當世目下のやうに小學問の切賣先生ばかり込み合ッて這ひ出しても面白くない、そ

ここで僕は吉田を純然たる立法的の學者にしたよ、幸ひ今年あの學校を出りやア、倉橋の置土産を其上に注いだ後、さらに僕また働いて大に注ぎ込む決心だ、一切の世事に迂遠となつても宜い、直接の人事に疎隔しても構はない、せめて吉田だけは俗界に超然たる高尚な大學者に仕立て、見たい、しかも哲理や詩人や宗教學者と違つて、おのれの身は世事に迂なりと雖も講じて施すところは正しく世事に缺くべからざる實學だ、また其身の境愚は人事に疎隔しても言ふところは正に人事の直接に關する必要學だから、神になり損つたり化物の仲間入したり仙人の眞似をする氣遣ひはない第一あの吉田は僕が昔、都門を去つて故郷に馳せ歸る途上、箱根の山中で逢つて、其時、既に苦學の效なきを説き踵を返して耕すに如かざるの利を論じたが騎虎の勢ひ少年の血氣、已むを得ず一片の名刺を添へて汐入村の君等に託した男だから、いはゞ僕に輕からざる責任があるさ、また學者に適當の人物だらうと信じて

るが、どうだね上田、君の意見は」
 「名論々々、情に於て理に於て、たゞ感服の外なし、さらに間然するところなし、僕に何の意見も現金もあるもんか、なるほど、學者なるかな、學者なるかな、わけて専門の學者なる哉だ、同じ汐入村の連中でも大體に器の出來て居た君や倉橋の如きは格別だ、黒田の如き僕の如き底のない人間が徒らに無用の書を讀んで空しく屁理窟を捏ね廻した果は斯の如しだ、如何にも吉田をして時勢の必要に應じた秩序ある一定の専門學者にしてやりたいよ、ねエ、せめて五人のうち半数以上、三人だけは社會有数の人物となつて立派な活動をして貰ひたい、あとの二疋は屑だ、汐入村の古巢に對しても申譯の無いこつたが、さて屑は屑で今更ら仕方がない、同じ一本の樹に生つた同じ枝の柿の實でも自然に大小あつて甘いのと酸っぱいのがある道理さ、しかし黒田の如きは譬ひ喰へなくつても絞つて澁の取れる奴だが、僕の如きは外觀

ばかりの大粒で甘くもなく酸ッぱくもなく只これ枝に宿ッたま、腐りついて加之も最後は鴉の嘴に啄き落とされる方だね、は、は、は、あはれ果敢ないものさ」

「なアに君、さうで無いよ、飾れる牛は犠牲となるの諺、世に出て用ひらる、奴は社會といふ大釜の熱湯で煮殺されるやうなものだ、どこまでも君は君たれ、あくまでも平然として見物すべしだ、達人の大觀といふ語を詮じ来れば結局この釜の外に立ツてる意味だ、たゞ社會の大釜が白湯のま、ちやア餘り淡泊すぎて味が無いから、いろんな奴を煮出して汁加減をする理由で、その煮汁の多く出る奴と少い奴が才子とか馬鹿とか英雄とか凡俗とか稱するのさ、釜の外に立ツてるものは固より智愚の差なく成敗の別あるべき筈がない、ところで君は其ま、見物して居て貰ひたい、いはゆる物外の超然主義だ、決して近寄ツちやア不可ない、かの黒田の如きは煮汁にもならず見物も得せず釜の端で火傷ばかりして居る奴だ、は、は、は、」

「なるほど、こりやア面白い、古今ともに未だ聞かざる比喩だ、しかも簡にして盡せりだ、煮ても汁の出ない僕の如きは、如何にも世に出ない方が宜からう、しかし黒田を釜の端で火傷ばかりして居る奴たア少々酷だな、あれでも沸騰點に達すりやア多少の味が出る奴だから、どうかして君、煮出してやりたいもんだな」

「いや、鏝のきかない豆腐と一般、いくら煮ても沸いても汁を出すどころか、折角いろんな物から出た外の汁を吸ひ取る奴だぜ、しかも豆腐の煮え切ツたのと夏の雲は見て居て判らないといふくらゐの難物だ、は、は、は、時に上田、妙な事を聞か、そもく、金といふものを君の考量で何と思ツてる、たゞ單に君が頭腦で世の中の金は今日の事實上、どのくらゐの勢力效能あるものか、それを聞いて見たいもんだ」

「こりやア唐突に大變むつかしい事をいふな、金、金の勢力か」

「さうよ、經濟學者が説く富の講釋や拜金宗の信者が演べ立つる功德は從來、さんざ

耳が聾するまで聞き飽きてるから、比較的その金なるものに淡泊の君、つまり金のために性を枉げず意を傾けざる君の説を聞きたいのだ、いはゆる俗物に俗を聞くの用なし、たゞ雅人に俗を聞き俗人に雅を聞いて後、始めて面白いからなア」

「は、は、は、金か、金は最も卑しむべきもの、金は諸々の罪惡を産み出すべきもの、金は有形物を購へど無形物を購ふの力なきもの、金は身に過ぎて持つべからざるもの、金は集めて散すべきもの、金は多きを以て其人の價値とすべからざるもの、金は死後に伴ふべからざるもの、以上まづ斯の如く思つてゐるがね、さて奈何せん今日現在の事實上、さうでないね、さうでないどころか、大に然らず、寧ろ正反對の結果を來すから堪らないよ、つまり僕の如き二十貫目の無用物が出来る所以だ」

「ぢやア君、君の見るところ今日の社會に於ける金は全體どうだね」

「何物か我に答へしめて曰くさ、金は人生第一に尊ぶべきもの、金は諸々の罪惡より

も總ての名譽を産み出すべきもの、金は有形物に止らずして無形物また自由に購ひ得らるべきもの、金は身に過ぎて持たねば殆ど効なきもの、さらぬだに金は散り易く消え易く減り易きもの、されば集めたまゝで飽くまでも握つて虎の子とし守錢奴となるべきもの、金の多きは正しく其人の價値となるべきもの、金は死後までも光輝を放つべきもの、あゝ斯の如く答へたくは無いが君、残念ながら心外ながら遺憾ごとくに極れど儲はや、どうも仕方が無い、智者も學者も名譽も腕力も戀も情も殆ど金の前に頓首再拜する世の中となり畢ぬだ、否、片々たる人類個々の間に生ずる一切の事物どころか、金は人事の外に逸して天を奪ふべし、金は海陸幾萬の戰鬥力を壓して國を奪ふべしだ、こりやア我建國の礎盤上に於ては斷じて行はれないこつたがね君、いづれの國土でか政府なるものも竟に一個の請負事業として株式組織になるだらうぜ、は、は、は、は、は、は、人身賣買は法律上に禁じてあつても害は寧ろ幾百倍の人

身賣買が公然として事實の上に施行せらるゝ今の世の中だ、買ふ奴の罪か賣る奴の罪か知らないが、さて市場に立って賣りも買ひもせられない奴は御覽の通り、は、は、コンな野郎さ、もしくは咄この野郎に毛の生えた奴が、いくら高く清く大なる理を説いても唱へても、わいゝ騒ぐ盲目千人の脚下に踏み潰されて、ぐうの音も出さず、ねエ君、黄金を見ること糞土の如しといへど、その糞土の世の中だから萬事こゝに休すだ、もし金に反ければ死するに如かず、金に反いて死せざる奴は廢物に等しかね、金、金、金なる哉と僕は決して言はないが畜生、あゝ何物か僕をして無理往生に言はす奴があるから残念で堪らない、癢に觸つてならないよ」

「面白い、なかゝ面白、ところで上田、その金は現在社會の事實上、善人に多く與みするか悪人に多く集るか」

「無論、悪い奴が多く持つてるやうだな」

「なるほど、ところで上田また一つの疑問がある、全體この金といふものは智者が多く得るだらうか愚者が多く持つだらうか」

「さア其處だ、どういふもんか金は伶俐な奴より馬鹿な奴が多く持つやうだな」

「むゝ、して見ると善人で持てず伶俐で持てず、つまり金は馬鹿で悪い奴の方に片寄る事實だな」

「いや、さう問ひ詰められると少々困るが、まア今日の現實、然りと答へたくならぬ」

「そもゝゝ人生それほど必要の金が、たゞ悪人と馬鹿にのみ占有されて、智者と善人とが空しく指を咬へたまゝの傍觀たア、頗る面白くない現象だな、殆ど事實に於てあるべからざるこつたね」

「あるべからざるこつても現在あるから仕方がない、面白く無くつても今日の事實だ」

修行の傍ら、この事に關する文明國の取調をして貰ひたいと思つたからさ、豈それ一朝一夕の企謀ならんやだ、は、は、は、かう白狀して見ると僕も随分、悪い奴だな、なかく、黒田の狡猾な詐偽的手段を喧しくいふ資格は無いよ、しかし上田、安心してくれ、人の禪で自己が好きな相撲を取る意味でもない、また勝てば感謝するが負けて愚癡をこぼす男でない、まして此事たるや幸ひにして出來たところが一時は殆ど社會の人心から擯斥せられて惡魔の如く叫ばれ蛇蝎の如く忌まるゝこつた、もしそれ敗れた曉は川上三吉、もはや再び人間として世に立つこと能はざるのみか、忽ち面皮を剥がれて生きながらの地獄に落ちる覺悟だから、夢にも倉橋や吉田の名を出すべき筈は無い、もとより組んで落すやうな狼狽へた下手な事はしない、飽くまでも責任は僕の一身にあつて、たゞ人知れず内々そつと二人の學んで得たるところを利用、いや利用と言つちやア濟まない、ちよいと先づ拜借いたし候だ、は、

は、は、は、
「嗚呼ますく、我の愚なるを知る、どつちへ立廻つても僕は到底、無効だ、何故また僕のやうな人間を君は捨てないのだよ、わからない男ぢやアないか」
「そら、そこが君の眞價だ、十有餘年來こゝに君を敬愛して僕の得捨てざるは實に、そこだ、いはゆる當世の才物と稱せられ利物と呼べる、徒輩ア川上三吉の眼中、屁の如しだ、今更ら君、つまらない事をいはずに、む、さうだ飯でも喰はう、家に歸つて細君に申譯のため五時の夕飯を四時に繰り上げて喰はうよ、菜は豚と大根だ、珍味ならずと雖も、もし人間その日の衣食住を浮世の敵とすれば、借家住居の綿衣ながら屋根の下で着物を纏うて無事に夕飯を喰へば先づ今日の戦争に勝つたも同然だ、は、は、は、おい芳、さア急いで夕飯の仕度だぜ、飯が濟んだら上田、散歩かたがた藤でもあるまいから君の家まで送らうよ、ついでに細君へ家憲の四時半は聊か過

されど本人みづから鼻の先に小皺を寄せ冷かに浮世を見渡しつつ、せゝら笑ッていふ、
 どこの木の股から飛んで出た奴の寢言か知らねど、そもく血の氣の通ッて生きた五
 尺の自由動物に對ひ何がため螻蟻の行列に等しく一定の軌道を傳はしめんとぞする、
 さるをまた膽ッ魂の小さい料簡の狭い臆病な有象無象が戦き怖れて、逆も出来ない無
 理な注文に入らざる義理を果さんとするがため、あたら生涯を日夜に苦惱輾轉して首
 吊亡者の生き返ッたるが如く、いや善い悪いの濟むの濟まぬのと喧嘩腰に跳ね廻ッ
 て立騒ぐ白癡の骨頂どもが、この乃公を稱して俗物と呼ぶも野卑と譏るも墮落と歎ず
 るも人外と罵り不正と叫び非義と喝し汚醜と嘲るも、誰か知る本人こゝに洒然として
 事に譬ふれば猛牛の角を螫す藪蚊一疋の痛痒も感ぜず、さア吹く奴は勝手な熱を吹け
 我に於て何かあらんと冷笑ひながら、現在おのれが世の中に通らぬ勝手な熱を吹いて
 年經し大蛇の如く社會の薄闇き一隅に蟠りし黒田健次、これも汐入村に苦學十年の讀

書生より出でたる男かと思へば、時に依ッて意志の激變と物に觸れて境遇の流轉と人
 間の末路うたゝ恐し、

ことしの春、臥龍梅の曉に川上の不意討を喰ひし時は、はや片脚を魔界の一端に踏
 み入れながら、まだ幾分か世間を憚る紳士風、當世流行の洋服に人目の沙汰を包みし
 が、やうくこゝに半歳を経し秋の半滯には、いつしか伊達浴衣の素肌に口綿の大島
 紬を着流して、大名縮絲織の袷羽織に茶色の丸紐を寛く結びさけ、腰に纏へる白縮緬
 の兵兒帶さらぬも時計の金鍵たらりと重く、やはた黒の鼻緒は兩ぐりの低き駒下駄、
 盲目に探らしても世の中のためにはならぬ風俗、懐手のまゝ帽も被らず紙煙草を横咬
 へしながら、烏森の水月といへる待合の格子戸より、ぶらりと立出でし黒田の面前に
 惘然と佇むは吉田雄藏、勢ひを得て跳ね出す鬼の前に涙を含みし佛像一體、据ゑたる

が如し、

冬まだ来ざるに木綿飛白の綿入羽織、夏は既に去れど單物の二枚着、紀州ネルのシヤツを現して小倉の袴に山桐の書生下駄、學校の徽章ある帽子を脱いで師傅に對ふが如く慇懃の禮を施しながら、

「黒田さん、貴兄の御住居は當時、こゝで御坐いますか」

流石の奴も思はず二の足を踏んで、ぎよツとせしが、身に取ッて暗劍殺の川上にあらず、まだ油斷のならぬ倉橋にあらず、喝破鐵拳いづれか來るべき上田にあらず、たゞこれ乳臭黄口の吉田雄藏、はや與みし易しと一口に呑み込んで俄の高笑ひしながら、

「やア吉田か、久しく逢はなかつたが、いつも達者で爾來ます／＼致々として勉強してらだらうな、いや何よりのこツた、しかし今日は何處へ」

「はい、あまり御無沙汰いたしましたから、御機嫌を伺ひ旁」

「む、僕へ、わざ／＼この黒田を訪問に來たのか、君が」

「さやうで御坐います、實は一昨日、おかけで、どうか斯うか學校の方も先づ濟んで仕舞ひましたから、その卒業證書を御覽に入れて、この後の方針に就き、御高説を」

「聽いて來いと川上が吐したんだらう、まさか上田は其處まで意地わるく出る男でない、第一この巢を知ッて居る奴は三公だ、しかし宜いわ、まア這入れ、こゝは僕の住居でも何でも無いがね、は、は、は、は、差支はないよ、兎も角、這入ツた／＼、おいおいお客様だぜ」

苦しませ腹立ませに、お客様だと洒落れ飛ばしながら、進みかねし吉田雄藏を引き連れて其まゝ奥の一室に打通らんとすれば、人知れず浮世を忍ぶ黒田がための戀女今この家の舞臺に寄せ來る敵を惱ます女將軍、おもはず眉を擧めて、

「この方ですか、お客様は」

「さうだよ、こりやア乃公が遠縁の親類筋に當るもんだ」

「おや、よく種々な遠い御親類がある事ね、この春も梅見の時に啞で氣の狂れた」

「しッ、黙ッてる、黙ッて引ッ込んでろ、誰か少婢を出して茶と菓子と、そしてね

酒は入らないから何か美味もの、こてと持ち込め、飯の代用は海布卷だよ」

廣からねど片廊下の中庭を隔てし奥の六疊一室、小婢が持ち運びし茶と菓子を進めて例の横着面、ぱツと吹き出す喫煙の中より吉田に對ひながら、

「あんまり此の中の間道ばかり駈け歩いた罰で、行くところへも行かれず竟に斯んな荆棘の中へ落ち込んだ僕と違ッて、君は後れながら順序よく大道の中央を歩いて來たんだから、實に幸福だ、どうか其上さらに立派な人間となッて社會に立ッてくれ、この外は君に對ッて一言の可否をいふべき資格がない、また同じ汐入村から出た中

でも君は別して川上に恩を荷ッてる身體だ、萬事よく川上に相談して今後の方針を取るのが宜いぜ、何と言ッても、一番わかッた奴は川上だ、しかし其わかッた奴だけに突然また斯んな洒落をするから困るよ、は、は、は、わざ、君に卒業證書を持たして今この境遇の僕を襲はなくッても宜い筈だに、とはいふもの、上田をして吐鳴り込まさないところは、やはり川上だ、銘茶の苦味を帯びたる中に一點いふべからざる甘味を含めるが如し、時に川上は近來どうしてるね、上田の消息また聞きたい、二人の細君もろともに相變らず無事だらうな、その出來工合は自然に違ッてるが儲どツちも其良人に連れた申分のない唄アだよ、おの、實に能く伉儷を得てるからねエ、お互の幸福だ、君も他日、妻帯する時は實際、よほど考へないと不可ないぜ、かりにも意氣とか粹とか言ッて斯んな家へ出入する魔性の烏田鬚や、愛とか何とか言ッて嫌に戀の講釋をしたがるやうな蝦茶袴を君、うッかり脊負ひ込んぢやア

り合ツた交情だからなア、あかの他人の出世たア思はないさ」
 何を感じたか、この横着漢の眼中に一雫、ほろりと露を含めば、さらぬだに豫ての思
 ふ事を十分一も得言はざりし吉田雄藏、胸に迫ッて齒は咬ひ縛れど、はら／＼と流せ
 し涙は兩の頬を傳ひぬ、

「黒田さん、實は今日、これだけの事で来たンぢやア御坐いません、たゞ御馳走にな
 りに来た吉田、吉田雄藏ぢやア御坐いません」

「わかッてる、よく知ッてるよ、川上に言はれて来た外、また別に君が一個の意見と
 して、この墮落物を諫めに来たンだらうが、どうか暫く黙ッて見て居てくれ、異端
 邪道に傾くの恐れありと雖も、目的は手段を辨解す、いつまで此まゝの黒田ぢやア
 朽ち果てない覺悟だ、ちよいと一時の成行で斯んな薄闇い片隅へ迷ひ込ンだが、ま
 だ人間界の方角まで忘れ切ッて仕舞はないから、兎も角最後の一點は安心してくれ

吉田

「其、その一言で今日は、まづ黙ッて歸りますが、どう考へても、いくら思ッて見て
 も、あんまり惜しいこッてすからな、實に残念で堪りません」

「さのみ、惜しい奴でもないが、惜しんでくれる芳志は厚く受けて感謝する、また其
 の芳志に酬ゆる時もあるから、こゝ暫時だ、見遁してくれ」

逢へば滿腔の熱血を注いで飽くまで諫争せんとせし吉田雄藏も、今は只こゝに無言の
 涙あるのみ、やう／＼座を起ッて黒田に送られながら、門口に出でて思はず振り返り
 つゝ、悄然として歩み出せし背後に聲あり、

「おい吉田、待て」

破鐘の如く叫びしは思ひも寄りぬ上田力、肩幅廣く胸板厚き大兵に木綿着の袖も裾も
 足らずして四谷丸太に似たる手足ぬツと現しながら、流行に後れたる大鐙のメリケン

帽、身體に不相應なる櫛齒の日和下駄、五月人形の武者に等しき眉を逆立て、白晝捕獲の梟に等しき眼を見張つて、のそくと歩み近づくや否、御待合水月とせし細看板と俄に一驚を喫せし吉田の面體とを睨み分けつゝ、

「此家は何だ、そもく君は何の用があつて、こんな家へ出入するんだ」

「いえ何、こりやア今度、一所に學校を出たもんの親類で、その男が是非こゝへ來てくれといふので、つい何の氣なしに、しかし、まさか斯んな家とは思ひませんからなア、實は驚いて」

「むゝさうか、それなら宜いが、大體その男が馬鹿な奴だ、わざと何のために君を此家へ、兎も角そんな怪しい奴と交際しない方が確實だ、もし川上にでも見られると善くないぜ、さア同伴に行かう、僕か、僕ア今日、芝の山内でね、あの寺院に多少の名を得た學者連が哲理上の討論演説をするといふから、こいつア面白いと思つ

て出掛けたのさ、ところが怖るべし味噌も學者も錢の世の中だ、傍聽料が大枚金二十錢、いくら立派な議論か知らないが、鏝一文を出來す道もない僕が君、わざと二十錢を投じ時間を潰してまで謹聴せられるかい、そのまゝ山内ぐるりと廻つて乞食に二錢を呉れて歸つた、はゝゝゝゝ」

吉田が門口へ出るや否、待てと吐鳴りし聲もろとも上田の姿ちらと見えし間一髪、はつと驚いて流石の黒田おもはず首を縮めながら、慌てゝ内へ逃げ込めば出合頭の女將軍、猶更ら驚いて飛び退きつゝ、

「あら、まアどうなすつたの」

「しッ、しッ、静閑にしろ」

「何ですよ今日は、妾が物さへ言へば、しッくと呵しな手眞似ばかりしてさ、古い借金取か、従前の色女にでも見付けられたんぢやア無いんですか、借金取は兎も角、

女だと承知しませんよ」

「馬鹿な事いはずと靜にしろッてば、そら例の梅見で喰はしたあの啞の狂者だよ」

おい、おい、これさ、わざと出て見なくッても宜いぢやアないか」

「だッて面白いですよ今の書生さんが、どんなに困ッてるか、やはり同じ遠縁同士でせう」

「だからよ、猶更ら面倒だ、もし舞ひ戻ッて連れ込まれでもして見ろ、第一あの啞は狂者のくせに物覚えの宜い奴だから一度こゝへでも来りやア、毎日々々押し掛けて来て蒼蠅いぜ、どうも乃公の親類にやア妙な奴ばかりあッて困るよ」

「なアに啞でも狂者でも男の親類は、まだ始末が宜う御坐いますよ、しかし油断すると今に白粉ツ氣の御親類筋が出て来るかも知れませぬね、ほゝゝゝゝ」

「何だと、乃公の事より御手許拜見だ、かねて聞きも及ばない妙な叔父さんや變な兄

さんの不意に飛び出さない用心しろ」

「お氣の毒さま、亡妻がくと口癖にやうにいふ死んだ人も御坐いませぬよ、ほゝゝ

ほゝゝゝ化けて出ても怖かアないでせうね」

「さうさ、生きて腹に一物ある女よりやア安心だ」

「おや、薄氣味の悪い何處の誰が、お腹の中に一物や荷物を仕舞ひ込んで居ますの」

「なアに遠方ぢやアない、つい御近處らしいよ、しかし確乎に見届けた事實でもない

から、さのみ大きい聲ぢやア言はれないがね、はゝゝゝおツと此邊で御停止だ、う

ツかり深入すると一年の生命が半歳で無くなる理窟だ、家内安全延命息災」

「あれ、戯談かと思ッて居りやア、異に擲んで急に戯談らしくない事を仰しやるの

ね、何だか小耳に觸りましたよ」

「耳に觸ッたぐらゐは何だ、氣に觸ッて腹に据ゑ兼ねるまでは堪忍するもんだよ、む

かしの身にも今の家業にも似合はない野暮に出て困るぜ、をりく唐突に」

「どうせ野暮ですよ、妾は、野暮で馬鹿で不容貌だから今の世の中に内兜を見透かさ
れながら、おめく其人のために丸裸となつて一所懸命に働きますのさ、え、ツロ
惜しい誰が斯んな野暮にしたのだ」

「やア、おツかない、そろく例の幕開、でんばふ肌が出て来たわい、は、は、は、ど
りや手疵を負はないうち湯でも一浴、這入つて来よう」

「どこへでも勝手に好きどころへ行くが宜しいさ、正直に舞ひ戻つて来なくつても
宜う御坐いますよ、第一うろくと點燈頃に居られちやア却つて迷惑いたしますや
うな次第でね」

「いや、承知しました、仰せまでもなく御家業柄よく辨へては居りますがね、つい此
家に磁石のやうな女が一疋、は、は、は、それがため鐵腸男兒なほさら以て吸ひ寄せ

られる理由さ、實ア乃公だつて毎日々々弱身ばかり見せに来たかア無いよ」

「それほど残念なら、わざく来て貰はなくつても結構、やはり築地に在らッしやい、
春洋館の姉さんに小遣を渡して置きますから、しかし用のある時は、すぐ来るン
ですよ、は、は、は、」

「や、ますく驚いた、まるで勘當息子の親類あづけだ、今に丁稚小僧として追ひ使
はれるだらう、かりにも先祖に申譯の無いコツた、は、は、は、」

あ、隅田川の邊り汐入村の昔日、出でては破帽弊衣に満都の衣香扇影を喝破し、入ッ
ては茅屋窓下に半夜の讀書議論を上下し、同志五人その飢ゑたる空腹に天下を呑まん
とせし一人の黒田健次も何事ぞ、今は浮世の泥水に育ちし牝一疋と晝日中に癡話口説
して、いつしか骨なく腸なく海月のやうなる牝一疋とぞなりぬ、

其七

吉田雄藏こゝに當年二十四、そもく首を回せば十七の夏、大切の家の主人が九死一生を枕頭に竹筒の白米を打振り嗚呼あの人も振米の音まで聞いて死んだからは現世に思ひ残す事あるまいといふ、その餓鬼道より二十里とは隔たぬ豊後國因部の里に生れて、志を立て身を起しつゝ、山河三百里を踏んで來るの途上、これはまた苦學十年の都を捨て、故郷の月に嘯かんとする川上三吉に出逢ひ、函根の山の綠蔭深きところに汗を拭うて千本の筆は一挺の蹶に如かず萬卷の讀書は一段の田地に及ばずと説かれしが、少年の血氣さらに屈せぬ騎虎の勢ひに強ひて東上せんとせしより、さらばとて一葉の名刺を貰ひしは汐入村の因縁、ほどもなく川上また知己の熱涙に引き出されて再び都門に出で、遁れぬ縁あつて富田家の戀婿となりし時は、吉田を其家に引取りて暫

く漢英の私塾に通はせ、あらたに學資を給して法學校に入れしより前後七年、今は一の卒業證書を持てる男として辯護士の試験にも判檢事の及第も確乎なるべき優等生と稱せられぬ、

されど川上は猶いまだ思ふところありとて、直ちに求め得べき衣食の道を許さず、しかも死際に振米の音を聞くといふ人類稀薄の深山に近き故郷へ歸さば、日本一の大都會より錦繡を飾り來りし學者と呼ばれて烏なき里の蝙蝠紳士になり了らんことを恐れ、幸ひ倉橋が置土産に残したる二千金のある間、奮勵一番さらに蓬髮垢面の一書生たるべしとて、さながら嚴父の子弟に命ずるが如く、そのまゝ、校友通學の資格にて講師中第一の席に占めたる法學博士の家に寄宿せしめつゝ、今後五年の修學中は斷じて世事一切に曉の夢も寄すべからず夜半の寢言も託すべからずと説き伏せぬ、されば吉田雄藏いよく恩に感じ情に泣き説に服して奮勵激發、同じ業を卒へし學友

いづれも故郷に歸りて父母親戚の笑顔に迎へらるゝ用意に忙しく、都下に止まるものは知己の間を奔走して衣食の道を求むる詮議これ急なる中に、一人たゞ平然として、上田の家に宿ること三日、川上の許に居ること四日、やうく七日の後は舊狀また依然たる一書生、夜具と本箱を合乗車に積んで自己は着替への風呂敷包を小脇に抱へながら、色褪めし小倉袴に履き古したる山桐下駄からころと響かして例の博士が家に入り込みつゝ、立關脇の六疊一室に陣を取つて二度目の合戦に出でんとす、博士の家には既に三人の書生あれど、皆これ通常一般の食客の書生、酷にいへば食ふに道なく居るに家なくして哀訴歎願的に藻潜り込んだる徒輩、常に立關番をさせられ時には下女がはりの小使に追ひ立てられながら、さらに歎聲なきのみか、先生不在の間は悪摺れに摺れ切つたる破羽翼を伸して白癡が夢みるやうな酒色の全盛沙汰、たまたま無代價の講義録を繕き、をりく無月謝の學校に出づる恩恵ありとも、固より

苦樂本末を誤つて下宿料の催促なきを得たりとする中に、業を卒へて後なほ更に業を修めんとする吉田雄藏こゝに來りしかば、いづれも眼を欬て面を膨らして無用の飛入とぞ嘲りぬ、されど在學中は常に首席の優等生として知られ、今また校友となつて大成のため我許に來りしものと思へば、主人の博士が信用いよく深く、うまれついでにの性行に自然の溫和を帯びて家族の待遇ますます篤く、しかも川上が俗物に對する浮世の呼吸かくすべしと笑ひながら、吉田をして月に六七圓の物は何の意もなく取るに任して取らしめしかば、無用の飛入と嘲りし嫉妬偏執の奴等も果は餌に飢ゑたる猿の如く親しみ、氣の詰つた變人と笑ひし下女風情も人知れず私語いて、外貌に似合はぬ曉つた方と譽めちぎりぬ、麻は蓬に交れど伸びて直きの諺、身は同じ他の書生と立關脇の一室に起臥ながら、い

つしか内外の用ひ重くなりて客分の如く取扱はれつゝ、晝は博士と共に學校へ出で、更に撓まず研究の傍ら、その出版すべき講義録の訂正取捨を託され、夜は歸りて五時間、間を睡れる外、燈下に頭を埋めて孜々たる傍ら、をりく主人に對うて論争討議する時の勢ひは小心翼翼々の吉田雄藏こゝに熱火を吹くが如し、

けふの日曜を幸ひ横濱の親戚を訪はんとて、妻子を引き連れながら朝とく立出でし主人の博士が影を見送るや否、例の書生三人おもはず手足を伸ばして一日の太平樂、腹鼓は打たねど口太鼓を叩き出して俄に騒然たる折しも、玄關に人の訪ひ來し聲、しかも優しき女の聲と聞くより平生は雷の如くに叫ばれても聴えぬ管の聲どもが、どツと三人一時に電氣仕掛の如く飛び上ツて先を争ひつゝ躍り出でぬ、折しも奥の方より出で來りし吉田雄藏、三人もろとも一人の女を取圍んで喋々と囁る

體に肩うち擧めながら、ふと何心なく見れば何處やらに見覚えのある女、おもはず小首を傾けしが、忽然はツと驚いて玄關脇の一室に飛び込みぬ、やがて女が立去りて其姿の門外に消ゆるまで、なほ其まゝに饒舌り合ひし三人、また一時に入り來つて俄に雀躍しながら、さア珍事出來いよく天候不穩の兆あり、動もすれば閨門これより亂るゝの基、時節がら妙くとも先生をして我々に五圓づゝの口止料を出さしむべき價ありとぞ騒ぎぬ、

吉田雄藏わざと知らざる體、新聞を手にしながら靜に振り返りて、

「何だね諸君、俄に打揃ツて大變な威勢を出しますな」

「大變々々、さらに大々的の祕密事件こゝに發覺、どうです吉田さん、前祝ひに二三圓を拜借したいもんですな、また例に依つて例の如くでなく、これだけは必ず返済の義務を果します、ねエおい、目的が確實だから大丈夫ぢやアないか」

「無論さ、三人連帯で吉田さん、どうかね、この分だけは是非とも、きつと返金ますからな」

「なアに吉田さん、この二人に關らず僕が責任を負ひます、幸ひの日曜でもあるし、先生は細君同伴の不在中だし、しかも取るべき的があつて實は其五分一の目算で借りる理由ですから、どうか特別の御詮議でね、三圓だけ、憫れむべし堂々たる男兒の頭一個が僅に一圓づゝの割當ですよ、は、は、は、」

なるほど全く以て憫れの奴等ぞと、吉田雄藏おもはず意中の嘲笑冷罵を包みながら、顔色は浮世に馴れざる初心の體、懷中より臺口とりいだして、

「どうも困りますな、僕だって同じ書生の身で僅に限りある小遣だから、なアに返して貰はなくつても宜いが、度々かう強制的に遣られると閉口しますよ、しかし二圓や三圓ぐらゐる、いや三圓あるか無いか兎も角この臺口を、は、は、は、」

十五錢に銅貨七錢、これで宜ければ出ませうが、今、諸君が先生の秘密事件とか天候不穩の兆とか言つたのは全體どういふこつてす、實際、何かあるんですか」
 かりにも一圓八十五錢、また青首を絞めてやつたりと微笑を含みながら、何事にも三人のうちの音頭取、膝を進めて今更ら仔細に聲を潜めつゝ、

「吉田さん、實ア大變だよ、今、玄關へ女の客が來て、しかも其女が尋常一般た、普通の女でない、素晴らしい意氣な女で年輩、さうさな二十六七、ねえおい、なかなかの美人だツたな、僕ア近來あのくらの女は見ないよ、無論、吉田さん花柳狹斜の産物ですぜ、ところが其美人おもむろに曰く、先生は御在宿で御坐いますかと、いや不在だ何の用かといへば、いつごろ御歸邸になります是非お眼にかゝつて伺ひませんと少々、わかりかねますと叶して、畜生、薄氣味の悪い微笑を含んだまゝ決して要領を明さない、いくら三人が取巻いて寛嚴こもく、迫つても彼女、平然とし

て更に驚かないところは強ち境遇の自然に人馴れたばかりで無く、よほど何か先生に對つて人知れぬ親密の關係、もしくは一喝の下に追ふ能はず去るに及ばないだけの凄い文句があつて襲ひ來つたらしい様子だ、その證據には最後の一言かう吐した、もし御當家で御差支が御坐いますれば學校の方へ伺ひますと、實に形勢の穩かならシ皮肉な事を吐すぢやアないか、勿論、先生だつて今こそ嚴肅だが二三年前までは随分、風流罪を犯して御臺所に時々、やられた方だからなア、は、は、は、しかしあの女このまゝで濟む筈はない、どうせ近々また二度目の襲撃があるに相違ないから、こゝは一番、我々の働き場所だ、うまく遣ると必ず御褒美の出るところだ」

「なるほど、さう聞くと大變、何だか秘密のあるらしいこつてすな、しかし奥さんや女中なにかに漏らさない方が宜いでせう、なるべく諸君だけで先生へ直接、内々そつと申し上げる事にねエ」

「ど、如何して、臺所の女等に此秘密を洩らして堪るもんか、彼女等ア夫人直轄の刑事探偵で、僕等が尻を放つた事まで針小棒大に密告する讒者だから、まして第一の御褒美に影響を來すの恐れありだ、は、は、は、吉田さん、どうです、この一圓八十錢を一株として社員に入れませうかね」

「いや、そんな事になると僕のやうな人間は逆も無効だ、なるべく諸君の力で先生のため偏に平和の終局を祈ります、ところで今いふ其女、名前でも言つて行きましたかね」

「さア其處が所謂曲者の證據だ、なアに今こゝで諸君に申し上げなくつても先生が能く御存じの女、お目にさへかゝれば忽然に解りますと、いくら問うても頑として白狀しないとところが吉田さん、尋常の女でない、それも普通の女らしく少しは差俯いて優しい風情でもあれば格別、面憎いほど意氣な姿で、いきくと張り切つた黒

眼勝に我々三人の顔を真正面から等分に見分けながら、笑を浮べて洒ア〜たる體、むしろ凄味を帯びて居った、如何にも一物あるらしい女だ、あの様子ぢやア、よほど先生も確乎しないと危い、學校で生徒を並べて刑法の逐條講義をするやうな御手際には行くまい、は、は、は、いや笑ひごつちやア無い、うか〜すると先生の名譽に關すべき新聞もんだし。

吉田が何心なく此方より一目ちらと見て、どこやらに見覚えある女と思ひしが、はつと驚いて忽ち遁け込みしも道理、かの黒田が人知れぬ浮世の黒幕に身を忍ばせつゝ、もとは三筋の絲に鳴らせし小川屋の小米とやら、今は烏森の待合に寄せ来る敵を取つて惱ます水月の女將軍、そも〜如何なる祕密あつて博士を襲ひ來りしか、しかも三人の書生がいふところを聞けば、固より一朝一夕、きのふ今日の事にはある

まじく、いづれ久しき以前に深き根を持つて今の茂れる葉風を起し來りし事、わけて捨て言葉のうちに一種の冷笑を浮べて凄味を帯びしといへば、何としても博士の身に取つて面白からぬ事、されば其博士の許に日夜の業を修むる我として、また其敵の影に付き添ふ後楯まで知る筈の我として、そも〜此間を如何に處せんか、まして飛耳長目の世の中、さらぬも附和雷同の當世人情、もし事實を過り傳へて拭ふべからざる醜聞の暴露せし曉は、會ての恩ある友をして墮落いよ〜墮落せしめ、今の恩ある師をして忽ち名譽を失はしむべしと、吉田雄藏こゝに人知れぬ心を碎いて我身に迫るが如く打沈みぬ、

かゝる時には川上の外に人なしと思へど、うかと慌て、驅け込めば例の怖しき眼もて無言に睨み返さるゝは必定、さらば再び襲ひ来るを待つて後と思ひし其翌日の午後四時ごろ、博士が學校より歸りし時刻を覗ひけん、果して彼女が玄關へ來りしとて三人

の書生また一時に立騒ぎぬ、

大河の流るゝは却つて音なく、深き池水は軽く波をあけざるの諺、この柳島に引き移りしより殆ど一年、何のなすところもなく只そのまゝに睡るが如くなれど、誰か知る日夜の苦心慘澹は人生社會の裏面に向うて猛火の原野を燎くが如く、また談笑の間に自己が死生を投じて悠々たる川上三吉が面前に吉田雄藏おもはず眉を顰めて肅然と坐しぬ、

しかも談話は既に半を過ぎて、川上いよく苦笑ひの體、吉田ますます物思ひの體、「ぢやア何だね、よほど其女が博士に對して祕密の急所を押へてるらしいな、いや學者でも何でも當時多少の名を出してる奴に恐らく紅粉的の云々ないものは無からう、まだ色を賣るものに色を買つた奴の云々は罪の軽い部だ、冷かにいへば双方賣買の

色價段より生じた葛藤だからね、しかし中には人倫を没却せる色情狂が濟まし込んで公衆の前に修身談をやらかす世の中だぜ、ところで博士が其後の態度どういふ具合だ、よほど困つてるかね」

「勿論、口へ出しては言はれませんが随分と心配の顔色が見えます、しかも最初、取次いだ時は、そんな女に面會の必要が無いとのこつてしたが、折返して女が出した手紙を取次いだ時は俄に一驚せられた様子で、つまり明後日、乃公の方より必ず出るから今日は兎も角そのまゝ歸つてくれとの挨拶振を考へても、既に主客の勢ひが現れて居ますのみならず、その明後日は即ち明日のこつて」

「むゝその手紙の表面は何と書いてあつたな」

「取次いだ書生に聞きますと、先生の宛名ばかり書いてあつたさうですが」

「して見ると吉田、強ち黒田めの細工ともいへないよ、大體あの待合といふ家業が家

業だから、その家で出来た事は直接の本人よりも寧ろ間接の女將なるものに責任がある習慣さ、随分、相手次第で藝妓なにかに凄い悪智慧を吹ッ込む奴も多いがね、まさか黒田ア其處まで墮落して居るまい、いはゞ博士に對して第三者の地位よりも更に遠い影の男だもの、しかし君が師とする人の咽喉笛を覗ッて来る女が黒田の鼻ア同然とすれば、さて捨てゝも置けないやうなものだな」

「ですから貴兄が一言、黒田さん呼び付けて何とか」

「はゝゝゝ、トンだ役目だな、どうも困つた博士殿だ、しかし餘り人の祕密に立入り過ぎた無用の結果になつても不可ない、却ッて博士が迷惑しやアしないか、しかも法律家だ、情實的の間は免も角も火の手が降りやア乃公なにかより確實だぜ、第一また君等が心配するほどの事でないかも知れない、あまり外から騒ぐと却ッて悪からう、も少し傍觀する方が宜からうぜ」

「ですが先生みづから法律家を出すやうになつちやア、名譽上、もはや無効です、またこれが知れない敵であればですが、現在あの女を黒田さんの、實は雙方のため、忍びませんからなア」

「なるほど、その邊もあるな、黒田を打てば自然に響く女、ぢやア一番また彼奴を罵倒してやらうか、しかし例の蛙面馬耳郎、いくら喝破しても感じの無い奴だから困るよ、實は斯んな時、上田を差向けると頗る面白いが、今あの境遇を上田に見せちやア可哀さうだ、よし今夜すぐに出掛けよう、無論、歸ッても一切、知らない顔をしてるだらうな、つまり君が師に對する暗々裡の情だからね」

「どうか宜しう願ひます、お説の通り事實さう心配するほどの事では無いかも知れませんが、如何にも先生の憂色が眼に見えますから」

「はゝゝゝ、得て學者といふものは電氣のやうな神経質だから、山嶽震動して鼠が一

正ただひよこりと出る流ながが多いおほげ、はは、は、は、は」

其 八

さらぬも常に朝寢坊と晝寢のため、汐入村の昔日は絶えず蒲團蒸の刑に逢はされたる黒田健次も、幸か不幸か今は酔うて白晝の轉ころび寢に絹夜具そつと美人の手より軽く着せらるゝ境涯、折しも夕暮の枕頭を揺り起されて、まだ残る酒氣紛々ふつと吐きながら朦朧たる醉眼を開きぬ、

「誰だれだい、無遠慮な奴ぢやア無いか、宜い心持こころもちに面白おもしろい夢を見て居たところ」

「誰だれでもないモンですよ、さアお起きなさい、もう日が暮れますから」

「はは、は、は、日が暮れたから起きろ、夜が明けたから寝ろ、どうしても人間界にんげんかいに縁えんの遠い家業かぎふだなア」

「馬鹿な事こといはすに早く起きて下さい、ちよいと妾わたしは出て來ますよ」

「どこへ出る、肝心の商賣しょうばいを明けて今いまごろから、怪あやしいぞ、かりにも船頭せんとうが汐合しほあひを捨て、陸りくへ行くといふ事ことがあるか」

「ほほ、ほ、ほ、暢氣のんきな事ことばかり言いつてさ斯人このひとは、どこへ行くモンですか、その過日このあひだ、白羽しらの矢やを立て、置おいた例れいの學者がくしゃが來たンですよ、妾わたしに來いと言いつて使つかが今いま」

「むむ、さうかい、そいつア面白おもしろい、いよく堪たまらなくつて藻搔もがき出したな、しかし何處どこから呼よびに來たんだ」

「新橋しんはしの蓬萊ほうらいからさ、是非ぜひとも妾わたしに來てくれつて、罪つみなこつてすが、そろく物ものになりさうですよ」

「しつかり遣やつて來い、いくら唐變木たうへんぼくでも木偶人でくのぼうでも法律家しやうほいがらの奴やつだぜ、逆さかに取とられるな、此このごろの野郎やぼう髯ひげは却かへつて油斷ゆだんがならないから」

「なアに大丈夫ですよ、同じ法律家でもカバンを提げる方と違つて少々もう殿様めいた方ですからねエ、しかも底を泳ぎ出した上は此方の物、たゞ一網ですよ、待つて居て下さい、きつとお土産を持つて歸りますよ」

「は、は、は、なかく、凄いいもんだ、よく乃公が寐首を搔かなかつた」

「何まだ暫く入用だから胴に着けて置きますよ、しかし妾が凄いいよりも、ちよいと談話をするや否、すぐ下繪圖を描いた其處らの寐坊が、よほど悪黨ですよ」

「まア何でも宜いから早く行けよ、いふまでもないが最終局が大切だぞ」

年は二十六、女は水際だつて美し腕は利鎌の如く冴えて凄し、片頬に湛えし笑窪の露には幾何の人の溺れけん死骸の浮びし影もなく、愛敬こほるゝ眼元どれほどの家庫を潰しけん塵埃一本の痕も残さず、近き道とて車にも乗らで軽く歩みし足の下には由來

いかなる踏臺を蹴つて來りしか、今は只みる東下駄からころと響くのみ、

五人以上の客はせず六品以上は出さぬといふ料理自慢の蓬萊が門口を入りて、流石に同じ流れの如才なき笑顔を行き渡らせながら、初心めいて客の風體も聞かれず其まゝ

奥の一室、こゝぞといふ女中の會釋に首肯いて襖の此方に片手を支へつゝ、そろりと

引き開けて闕際に下けし頭をあぐれば、例の博士にあらぬ川上三吉たゞ一人、泰然として反身に睨み下す眼光ざろりと光りぬ、

いかな不敵の女も、はつと驚いて見れば猶更ら二度驚愕、ことしの春の梅見に出逢ひし啞の狂氣と呆れし頭上より、さア黒田の妻君、すつと進みなさいと言はれて、また三度目に殘餘の膽魂を引き抜かれぬ、

「どうしたモンです、初対面といふでもないに何だか大變、妙に遠慮深いやうですな、しかし今年の臥龍梅ちやア失敬しました、は、は、は、とところが今夜こゝへ來て

貰つたア他でない、そら例の先生の名代です、全體、どういふ御用ですか、過日わざらぐ持參で折角のお手紙だった、あの時はね、風を冒いて居って、つい鼻をかんで仕舞ったから、はッはッはッいや、それで改めて聞きに來ましたのさ、黒田の馬鹿、まだ生きて居ますかな、生きてさへ居りや、彼奴も此處へ呼んで盃の雫でも舐めらしてやりたい、實ア彼奴も其後どこを彷徨いてるか警察の世話にでもならなけりやア宜いがと、少しは心配してやつて居ったところが、まだ悪運が強いと見え、和女さんのやうな美人の厄介になつてたア僥倖な奴だ、あれでも何かの機會に一言や二言、當然の人間らしい事をいふやうになりましたかな、元來ありやア狂氣だった、さて狂氣も美人の介抱を受けると癒るもんらしいわい、あッはッはッはッ

狂氣が狂氣を嘲って啞がこれほど饒舌るのみか、天井板を吹き上げんばかりに傍若無

人の高笑ひして、床板を踏み抜かんばかりに雙膝を拍ちつゝ眞正面より睨まれしかば、鬼の面さへ逆撫でにすべき流石の場數女も、思はず度を失うて遁けも得やらず其まゝ其處に居縮みぬ、

學者でも博士でも自己が底の巢を泳いで浮びし上は網の目を遁さぬとは、如何にも思ひ切つて吐いたり面白い女、大の髯男を疊一枚の手鞠に取つて弄んだ腕前、どれほどの土産を持ち歸るか、人知れぬ微笑を含んで鼻唄まじりに待ち受けし折しも、門口の格子戸うち砕くが如くに引き開けて倒るゝばかりに驅け込むや否、不意に驚く黒田が胸倉に武者振り付いて俄の泣き聲、

「えゝ口惜しいッ」

「どゝどうしたんだ、おいこら放せ、放せッてば馬鹿」

「どうも斯うもあるモンですか、さア妾の、妾の始末を付けて下さいッ」
 をりしも開け放したる門口より川上三吉ぬツと入り來りて、驚く婢どもに眼もくれず
 只この體を冷かに見遣りながら

「やア大分、賑しいこツたね、やれく、どうせ出来る騒動を少し早めたんだ、宜い
 時分に分けてやるから互に負けず劣らず確乎やれ、は、は、は、は」

眠れる獅子やうくこゝに夢を破りしが、猶いまだ全身を動かさずして、たゞ僅に眼
 球を廻轉するのみ、されど其眼に何物をか覘へる、人知れぬ尾は春の渚を洗ふ漣の如
 くに大地を叩いて、はや幽に物凄き一種の音を起しぬ、

川上三吉續編

其一

俗とならば須らく大俗たるべし、雅とならば須らく大雅たるべし、何者の白癡ぞ前後
 に狼狽へ、中有に迷うて雅俗折衷などといふ、悟道を期せば宜しく塵世を脱却して大
 悟道を期すべし、煩惱を起さば宜しく火宅の中央に蟠つて大煩惱を起すべし、どこの
 臆病者ぞ二の足を踏んで生死の境に立往生する、照りもせず曇りもやらぬ一刻千金は
 春の朧月夜にあり、男兒うまれて世に處せんとするもの降りもせず晴れもせぬ曖昧模
 糊の曇天ほンやりとして鑑一文の價値あるべきや、黒たらすンば白たるべく白たらす
 ンば黒たるべき人間、そもく、黒白の間に巢を構へて鼠色の怪しき生涯ちよろくと
 何の面白さかある、浮ばすんば沈み沈ますんば浮ぶべき人間、そもく、浮沈の間に流

れて漂ふ根無草の生涯うかくと何の興味かある、人生を蜘蛛の巣にかけられし蟬の
 羽に等しき奴の眼より見れば利害を知らざる愚と笑はんが、捨てんとすれば思ふとこ
 ろに一身を抛つて微笑を含むの勇あるべし、浮世を臍の穴と一般あつて用なく無くて
 も足るべき奴の眼より見れば得失を知らざる狂と笑はんが、取らんとすれば石地藏の
 胸倉も取つて捻ぢ倒すの勢ひあるべし、梅櫻桃李の色も香もなく松柏霜雪の意氣もな
 く蕪太蒜の臭も味もない雑木雑草の奴原が徒らに罷り出でて毀譽褒貶を逞しうする世
 の中、おもへば糞土の中に病める豚の呻るが如し、
 されど起てば何物をか喰ふ伏虎の如く覺むれば忽ち百獸を驚かす眠獅の如き我こゝに
 ありとは、いはねど人知れぬ胸裡に焰々たる一團の猛火を抱いて、偽善と偽行とに装
 飾せる満都の青紅一帯を焼き盡さんとする大煩惱の快男兒、今の本所の果の柳島に山
 海の珍味はなくとも最愛の妻を伴うて朝夕の茶漬飯に舌鼓を打てり。

うき世を知らぬ空を凌いで鐵骨石壁に築きあげたる大廈高樓の富貴も、傾く軒を聯ね
 て貧苦を常の鼻唄まじりに送る九尺二間の裏長屋も、いつしか打沈む満目の風物と人
 間の理性とに迫られては、おのづから散り來る秋の木葉に肌の寒きを知る、ましてや
 都大路の繁華を隔てし柳島あたりは露いと滋く蟲の音も早し、
 わけて夜は一入の物淋しさ、按摩の笛も犬の遠吠えも聞えず、たゞ木枯の音のみ近く
 耳に入りて、草屋の軒は誘へど燈火の影しづかなる下に、むかしの戀も過ぎし情も今
 は自然の常となりつゝ、起きても寝ても珍しからぬ夫婦が何氣なく打解けて、語る言
 葉に花は咲かねど餘所に漏らさぬ深みどり、娛樂いとゞ其中にあり、
 しかも川上三吉が性として深く包める無言の本領は百鍊の鐵に等しけれど、うき世の
 萬事には圓轉流暢として野邊の淺瀬を流るゝ水に等しく、わけて用なき雜談には物の

理窟よりも小唄の一節を唄ひかねまじき男、いざといは、其ま、轉け込むべき褻衣の上うへに脱ぎ捨てし羽織はおりを拾ひろうて軽く打ち掛けつ、紐ひもも結むすばぬ胸むねの邊あたりを寛くろめて身みも心こころも抛なげ出したる體てい、うしろの柱はしらに脊せを凭もたせ胡坐あぐらの膝ひざに飲のみ乾ほせし空茶碗からぢやわんを舞まはしなごら、苦にがみ走はしりし顔面おもてに一種しゆの微笑ゑみを浮うかべて語かたれば、妻つまの芳よし子こも文金ぶんきんの高島田たかしまだより白襟しろえり紋付もんつきの大丸鬚おほまるまげを經へ來きたりし生家きやの風情ふうせいいつしか失うせて、くつきりと垢あかぬけし眞白まっしろの首筋くびすぢに黒縞くろじゆす子の半襟はんえりなほさら際さはだ立ち、ほつとりと身みに添そふ銘仙めいせん縞じまの常着つねぎに馴なれし晝夜ちゆうやの引ひ揚あげ帯おびどことなく世話せわ女房にようぼうにうつりて、わざとならぬ鬢びんの毛けの亂みだれを蒼蠅そうろうさけに搔かき上あげつ、男盛をとこざかりの良人をうとを見返みかへる目元めもと口元くちもと、女をんなの生命いのちこ、なり年は二十六、もしこれが浮世うきよの果はてに落おちて娛たのしむ文盲もんもうの戀こひならば、つれづれの秋あきの夜長よながに三味しやみの音ねじめの忍しのび駒こま、そつと爪つめの端はしに彈ひき出だすべきところなれど、かくても流石さすがに下司ひすめいたる卑いやしき癡話ちやわ口説くせつはなく、また却かへつて肥馬ひば輕車けいしゃを夜會やくわいに乘のり廻まはす舞踏ぶたふてき的たうせいふうかの當世たうせい夫婦ふうふうよりも清きよき愛あいと

美うらはしき情じやうとを保たもち、しかも其愛そのあいと其情そのじやうとに自然しぜんの風趣おもむきあつて、乾燥かんさう無味むみの詩し的てきを當あて箴はめんとする理窟りくつも文句もんくも無いところ猶なほ更さらら以もつて尊たふし、
「ねエおい、今更いまさら驚おどろくでも無いが、さて早いもんだね、ことしの春はるも春はる、まだ梅うめの蒼つばが固かたい時分じぶんこ、へ引き移うつつてさ、もう和女おまへ、秋あきの末すえだ、や、うか／＼して居ゐられ
ないわい、すぐ冬ふゆが來きて復またたちかへる春はるの空そらにやア枯木かれきも芽めを吹ふき踏ふまれた草くさにも
花はなが咲さくからなア」
「おや嫌いやな事こと、また今いまに一歳ひとつ、年としを取とるんで御坐ございますねエ、考かんがへて見みると、二十歳はたち
までは大變たいへんに長ながいやうで、十七八じゅうしちやうの頃ころは早く二十一はやくにじゅういちになりたいたいと思おもつてばかり居ゐ
ましたが、二十歳はたちを過すぎてからは、何なんだか物ものに追おツかけられるやうな氣きがして、ほ
ほ、よほど老ふけたで御坐ございますねエ、もう良人あなた、三十いっさんに幾何いくばくも無いんですも
の」

涯に甘んずるといふ事を間違つちやア不可ないよ、つまり和女が小遣として月々に貰ってくる三十圓も乃公の身分に連れ添ふ妻としては聊か過ぎたりだ、しかし、こりやア不自由のない岳父の家格に對し深窓に育つて來た和女に對する理由で、しかも其三十圓を世帯の大部分に供しながら逆捻に不足がましい文句どころか、實は有難く心得て感謝すべき筈のこつたがね、まア其上を取つてくれない方が宜いよ」

「ほ、ほ、よほど妾の心算では上手に、そつと祕して知れないやうにして居ますが、やはり分りますの」

「わからなくつてさ、威張つて言へば英雄また別に彫蟲の技ありだ、いち／＼聞かぬが今この境遇で毎日どれほどの菜が出来る、いくらほどの勘定となるぐらゐるは一考するにも足らないこつた、は、は、は、しかし和女、幾何ほどづゝ餘分に強請つて來た」

「いえ妾の方から少しも強請つた事は御坐いませんが、いつも良人、お父様の方から世帯向の事を、いち／＼蒼蠅く聞いて、それぢやア足るまい、なぜ早く言つて來ない、馬鹿な女だ、そんな事は内々そつと和女の働きにあるべき筈だ、ほんやりして居て濟むかと良人、さんざ叱られた上で貰つて來るんですもの」

「は、は、は、父には金を取りに來ないと言つて叱られ、良人には美味を食はして小言をいはれ、なるほど和女も妙な幸福で、つまらない損な役廻りを荷ぎ込んだもんだね、しかし娘の容色を餌にして金を絞る父を持つたり、女房の袖を浮世の幕に張つて嫌な狂言する男を持つより少しは宜からうぜ」

「はい、有難う存じます」

「これさ、變なところで禮をいふな」

「だって良人、さし當つて御挨拶に困りますもの、ほ、ほ、ほ」

「困った時は黙ッてるもんだ、なか／＼和女も此頃は人が悪くなッて来たやうだぜ、いや實は萬事に如才が無くなッたんだらう、然し其邊が丁度お人柄を落さず外さず自然に馴れた調子の善い所だ、それより以上あまり癡走ッて氣が利き過ぎても面白くなし、また從來のやうに懷中生育の令嬢風を丸出しに此貧乏世帯へ振り舞はされても閉口だからねエ、どうか其呼吸を失はず長く平均に保ッて居てくれ、いつも蒼蠅く言ふこッたが、古今ともに妻なるものは良人に對する無言の命令者だ、しかも女は世の中に於ける秘密の鍵といふくらゐ怖い潛勢力があるよ、は／＼／＼／＼とところで上田の命令者なンぞア彼男に對し彼境遇に對して頗る其當を得た女だね、また倉橋の鍵も未だ實際に使ッたところは見ないが、鑄掛屋の持つて歩く出來合の鑄びた鍵でないから先づ宜からう、たゞこゝに困ッたのは相も變らず例に依ッて例の黒田だ、今まで上田にも和女にも話さなかつたがね、實は彼奴、とんでもない化物を脊負ひ

込んで仕舞ッたよ、いはゞその化物に喰ひ付かれたのだ」
 「おや、黒田さんが、まアどうなすッて」
 「どう斯うッて、彼奴が近來の馬鹿さ加減、いやはや談話になッたもんぢやア無い」
 「だッて良人、ことしの春、まだ此處へ引き移ッて來ない前、濱町の家で、以後は萬事一切これまでの黒田で無いとか何とか、むつかしく大變に改ッたやうな事を仰しやッたで御坐いませんか」
 「言ッたとも、吐した段か、心機一轉さらに魂魄を入れ替へる、斷じて此まゝの黒田ぢやア再び會はないから君さう思ッてくれ、いはゞ十餘年來の交際を絶つか絶たないかの境など入らざる糞念まで押して出た奴だが、實は依然たる從來の黒田に猶更ら輪をかけた始末で、寧ろ一倍の悪い魂魄を入れ替へたやうなもんだ、勿論、世の中は談話半分、わけて彼奴の如きは十分一の實行が關の山で、折角あの倉橋が殘

して往つた置き土産の分配金も、まづ七八分までは夢うつゝの太平樂、わづかに残る二三分に氣が付けば彼奴に取つての出來た部に見て居るから、さして驚きもしないがね、女も女、たゞの女と違つた怪しい色香に迷ひ込んで、あれまで墮落するたア實に案外だつたよ、しかも彼奴が狂氣じみた闇雲飛び乗りの性として一夜に無用の千金を投ずる馬鹿は演ずるとも、まさか女のために一身の方向まで投げ込むたア思はなかつたよ、もし上田をして知らしめば、正に聲をあけて泣くべきほどのこつた」

「おや、まア、どんな女で御坐いますの、第一あの黒田さんは以前、大變に貞女で伶俐で容貌の美しい妻を散々いろくいな苦勞の果に、お氣の毒な死にやうまで、おさせなすつたといふぢやア御坐いませんか、また御自分でも口癖のやうに、亡妻がくくと仰しやるくらゐですから、外の事は兎も角、そればかりは大丈夫と思つて居りま

したねエ、どツちも妾は存じませんが、死んだ妻が嘸まア口惜しからうと、お可哀さうで、今の其、その女が憎くて憎くつて堪りませんよ、何とか良人、仕様の無いもんでせうか、いッそ上田さんに打明して、あの腕力で黒田さんを、動けないやうにしてあげたい事ねエ」

「は、は、は、さう和女が乗り出して口惜しがるにも及ばないが、全く困つた奴だよ、實はね、この春、乃公が臥龍梅へ朝飲前の運動に出かけた時、彼奴が其女を連れて清香馥郁の下に憚りもなく癡話つてるところを見付けたのさ、あんまり癢に觸つて堪らないから無言のまゝ出口の眞正面へ立塞がつて睨んだ拍子に彼奴どう狼狽へたか、煙草と間違つて出した紙入を引ッ摺んで歸つたのが、は、は、は、拾つたと言つて養育院へ寄附した例の金さ、しかし其ころは多少まだ幾分か彼奴を買ひ被つて、たゞ一時の事と思つて居たが、さて段々と探れば探るほど泥が深くつて、今ぢやア

迎も無効だ、その臭は既に臟腑の底まで染み込んで鼻持もならない始末さ、現に過日あの吉田が遣ッて来たのも彼奴の一件で、つまり今、吉田が世話になッてる博士の許へ近來、何か祕密の仔細ありけに笑窪の針を含んで來る女がある、其女が和女、何ぞ圖らん黒田の情婦で、しかも博士が人の知らない古疵でもある事か、頗る心中に恐怖を抱いてる工合だから例の吉田が氣として堪らない、一方は現在の師なり一方は多年の友なりといふ板挟みの立往生、思案に餘ッて乃公のところへ馳け込んで來たのさ」

「あら、わるい事は出來ないもんで御坐いますね、どこに誰が居るか知れませんから」

「は、は、は、梅見の時といひ今度といひ殆ど小説的の奇だよ、第一また其女が小川屋の小米と言ッた藝妓あがりの聊か凄い女で當時、烏森の水月といふ待合を開き、あの

黒田めが他日は知らず今のところ先づ其女の情夫兼參謀となッて長火鉢の向に南瓜の當り年然と坐ッてる事まで、兼て知ッてる乃公は猶更ら捨て、置けない」

「おや、待合の女將さんですの、まア黒田さんも外貌によらない事、なか、大した色男で御坐いますのねエ」

「なアに和女、縁さへありやア泥を呑んで來た女の常、却ッて往々あ、いふ男を好くもんだよ、つまり似たもの夫婦になる理由さ、ところで實は三日前の晩、そツと乃公が博士の名を僞稱ッて新橋の或料理屋から其女を呼びに遣ッたのさ」

「あら、今まで妾に何とも仰しやらないですよ、第一その女を小川屋の小米とかいふ藝妓で居た時分の事まで、どうして良人、御存じなの」

「おい、談話の途中で唐突に餘計な横槍を入れちやア困るよ、その事は後に判るから、まア黙ッて聞け、ところで呼びに遣ると、すぐ來たね、來る筈さ、どうせ何

博士の弱い急所を押へて胸に一物ある女だから、こりやア敵が苦し紛れに泳ぎか出したもんと見て取って、いはゞ大願成就の勢ひで、すぐ遣つて来たね、はゝゝ、はゝゝよほど面白かつたよ、實に近來の快だつた」

「ほゝゝ可哀さうなやうですが、また小氣味の宜い事、嘸まアびつくりしたでせうね」

「驚いたね、いかな女も度を失つて顔の色が變つたよ、しかも頭上から一口に呑んで仕舞つて、翻弄諧謔、罵詈訶笑、あらんかぎりの舌鋒にかけてやつたから、女いよいよ堪らない、とりわけ癩癖の強い女と見えて、物も得いはず眼を吊り上げ口を曲げ額際に青筋を現したまゝ、總身を震はして口惜しがつたよ、しかし流石は素人と違つて、もはや叶はないと見て取るや否、ぐずぐずとして居ない、ふいと俄に起つて音なき疾風の如く遁け出したから、實は乃公も聊か拍子ぬけしたが、此女このまゝ

無事に遁しちやア猶更ら何をするか知れないと思つて、斧を用ふれば根を斷つこの諺あくまで追窮して其巢を踏み破る勢ひで、聞き及ぶ烏森の水月へ襲ひ込んだところが和女、どたんばたんといふ物音、つまり黒田と夫婦喧嘩の眞ツ最中だ」

「あら、まア大變、とんだ事になりましたのねエ」

「そりやア和女、其筈さ、彼等の常として戀といふも情といふも、一時たゞ陽氣の加減の芽を吹いた狂ひ咲に等しく、どうせ半分は互に欺し欺されつゝ出来上つた淺薄卑近な間だから、ちよいとでも何か間違ひがあれば忽ち事だ、まして覘つて来た掌中の博士と思ひの外、案外の乃公に五體の血の氣が止るほど罵倒されて眼前ぐうの音も出なかつた口惜しさよ、馳せ歸つて飛び込むや否、長火鉢の前で微醉機嫌の鼻唄か何か唄つて居た黒田の胸倉に對つて爆發した體だから堪らない、奴め、不意に武者振り付かれて背後の柱へ頭こつく、さて斯うなると互に理由も仔細もあつ

たもんで無い、やア此狂女と横面を喰はせば、この狸野郎と猶更ら引ッ搔く喰ひ付く、いやはや言語道断の始末さ、あゝ人は境遇に依ッて作らるゝの諺ありとはいへ、そもくこれが汐入村の昔、ともに菜根を嚙んで志を立て書を讀んだ我等の中より出た男かと思へば實に慨歎の至極だつたよ、殆ど今昔の感に堪へなかつたね、まるで其日ぐらしの裏長屋に宿六と稱し山の神といふ無恥文盲の夫婦喧嘩に劣れりさ」

「いくら黒田さんでも何故まア、さうまで、おなりなすつたんでせう、そして良人、どう遊ばしたの」

「理も非もあるもンか、狂氣者の摺み合だ、手も付けられないから、やれく大に遣れと犬の喧嘩を見る具合で見物して居たさ、はゝゝゝしかし結局は乃公が仲裁して、兎も角その場を治めたが、さて治めるに付いては今まで隠れて居た雙方の籤蛇

が和女、によろくと一時に這ひ出してね、これまた始末に終へなかつたよ、つまり黒田は死んだ先妻に瓜兩断といふ點から惚け込んで加之も機會よくば何等かに利用せうといふ野心満々、女は春畫草紙の殿様めいた生ッ白い奴を喰ひ飽いた折柄、ちよいと一曲ある黒田が不思議に金を持つてるといふ點に乗り込んだ理由で、色は色と通じ慾は慾と通じ互の色慾こゝに合して竟に一の待合家業を開いたのさ、はゝはゝ、しかし男も男、女も女、かういふ男女が浮世の薄闇に巢を構へて細くない料簡を働かさうとするんだから和女、とても正當の道路を歩く筈が無い、ところで不幸にも第一番的に睨はれたのは例の博士先生よ、先生いまだ學士號の數年前、世間へは内々そツと新橋の一藝妓に關係して一子を生ましましたが、その藝妓は産後の病煩で死んだから、子には相當の金を付けて他人に遣ッて仕舞つたもんの、當時その藝妓の姉妹分で萬事その世話をしたのが即ち今の黒田の情婦だ、ね、しかも今日

その細君は曾て修業中の學資を貰つたといふ恩人の娘で、既に男女二人の子もある中へ立關の眞正面から昔の風流罪を數へて、私生でも庶子でも正しく先生の御長男どうか此お子を引き取つて戴きたいとの難題を持ち込んだのさ」

「だつて良人、それは過ぎ去つた昔の事で、父子の縁も何も一切その時に切つて仕舞つて、もはや關係の無くなつたもんで御坐いませんか」

「無論さ、まして理の前に情を許さざる法律家の頭腦だから、たゞ一喝の下に叱斥すべき筈だが、儲さうも出来ない理由がある、否、むしろ却つて恐るべき弱點といふのは外でも無い、その細君は件の如き恩人の娘で忽ち一家風波の基となるのみか、博士近來、ある公衆の演壇で大に今日の紳士を攻撃した言論中、彼等は殆ど醜業婦の奴隸として社會の表面に得々たり、彼等は醜業婦の助力に依つて交際場裡の圓滿を保てり、彼等は酒色の外に快樂の何者たるを知らざるものなりと、まづ先生この

邊で置けば宜かつたに、つい舌が這つて、いはゆる口は禍災の門口、もし男女肉體の交をして必ず其結果を呈するものたらしめば彼等一人として花柳の巷に棄兒の罪なきものは無かるべしとまで、激しく切り込んで、しかも其論説に諸新聞に掲載せられた時も時だから、いよく堪らないよ、いはゞ自己が糾つた繩で自己の首を縛るやうな場合で、はゝゝゝしかし其機を覘つて過去の古疵を持ち込んだ工合は女の智慧で無い、どうしても黒田奴の采配だ、はゝゝゝとところで雙方こゝに摺み合の結果、お互に萬事、祕密か暴露したから乃公の手前、ぐうの音も出ない、また出させない、わけて呵しかつたのは今年の春、かの臥龍梅で無言の不意討をかけてやつた時の滑稽さ、黒田の奴め、苦し紛れの窮策に、ありやア啞で少々氣の觸れた遠縁の男だと吐しださうだが、そんな馬鹿けた事まで現はれてね、流星の横着漢さらにな一文の價値なしさ、はゝゝゝゝ」

「あらまア、いくら慌て、惚れた女の前を誤魔化すにしても、良人を啞だの、狂氣だのと、あんまり酷い事をいふ方ですね、黒田さんには」

「なアに和女、其場の彼奴として、は固より當然の事さ、ところで雙方ともに眼前かくの如き體、もはや責めても諫めても無効だから、むしろ乃公は進んで似たもの夫婦の男女の交情を固く結び直してやった、しかしまた考へて見ると實に惜しいもんだ、倉橋や上田や吉田の眼からは却つて幸ひの悪魔拂ひをしたやうにも感じるだらうが、乃公の目ぢやア一個の奇才を竟に社會の暗黒面へ投じて仕舞つた遺憾ありだ、そもく、汐入村の昔より今日に至るまでの間、彼が出處進退の事々物々さらに一として節調に叶つたところは無いが、また事々物々さらに一として他人のために左右せられず、しかも失敗また失敗を重ね來つて屈せず驚かず、傍若無人いよく不節調の突飛たところに彼の彼たる所以を一貫して居たから、落ちて曲つても黒田健

次、どうせ難物たり怪物たる點は免れないが、まさか待合の亭主にならうたア思はなかつたよ、つまり倉橋が海外飛躍の置き土産に分配金の三千五百圓を懐中へ入れた時も、死んだ貞女と瓜兩斷そのまゝの女に出喰はしたのが彼奴の不運さ、今更ら仕方が無い、錆びても磨けば氷の如くなるべき名刀一本を折つて仕舞つた、もはや菜切庖丁に劣つた彼の境涯だ」

「何故まア男といふものは、さう氣の變り易い油斷のならないもんで御坐いませう」
「しかし乃公は大丈夫だから安心しろ、もし和女が死んだら浮世を捨て、坊主になるから、たとひ和女と瓜兩斷の女に嚙り付かれても平氣なもんだよ、はゝゝゝゝ」

「ほゝゝゝ、有難うは御坐いますが、坊様になつたつて安心は出來ませんよ、同じ嘘を仰しやるなら、和女が死んだら乃公も死ぬと言つて欲しう御坐います事ね」
「なるほど、こりやア、さういふべき筈のところだつたね、しまつた」

「どうでも言へる筈の嘘が良人、そのくらゐの薄情ですもの、死んだ後は俵置いて、生きて居る今は今で、なか／＼安心は出来ませんよ」

「や、頗る手厳しいな、ます／＼恐れ入った、いつの間に和女、そんな際どい太刀筋を覺えたんだよ、まだ乃公は和女を嬢様生育の初心な奥方と心得てるんだぜ、は、は、これこそ油断がならない」

「いくら妾でも良人、今年は二十六、うか／＼と舊事のやうに油断ばかり、おさせ申して置きませんから、さぞ蒼蠅う御坐いませうが、どうか其お決心で」

「委細承知、きつと以後は氣を付けませう、ところで夜も更けたり談話も盡きたり、どうだね、寢ようかな、別段、あらためて相談するにも及ばないこつたが、聊か御機嫌を損じたらしいから、わざと御意のほどを伺つて見るのさ、は、は、は、は」

「さア／＼お寢み遊ばせ、お床は二時間も前から取つて御坐います、お褌衣は其ま、

でよし、お風を召さないやうに、お夜具の襟も裾も後で押へますから」

「かさね／＼痛み入るね、ぢやア一寸お先へ手足を伸ばさう、もし萬一、どんな寢言を言つたつて和女の不足で無いよ、は、は、は、豫じめ斷つて置かないと、かういふ夜は得て失策のあるもんで、明朝また唐突に不意討の恐れありだ、なるべく今夜ア枕を低くして寐よう」

「は、は、は、いくら眞面目に怒りたくつたも、どういふもんか妾は最終まで怒り徹されませんから、いつでも無効ですよ、すぐ良人に誤魔化されて」

「さう和女、わざ／＼骨を折つて怒らないでも宜いちやア無いか、馬鹿々々しい」

「だつて良人、をり／＼妾に怒らせるやうな事を仰しやるもの、今度こそ眞實に怒りますよ」

「は、は、は、怖いね、離縁沙汰でも持ち出されない用心をしよう、いざとなつても黒

田のやうに喧嘩腰の無い男だからねエ」

「それ、すぐ、そんな事を良人」

「や、また失策ツた、しかし和女は相變らず天下太平だ、どツかに罪の無いところがあるよ、あ、願はくば此ま、長く行末かけて浮世の罪を知らしたく無いもんだ、をかしく變に嫌な苦勞を仕過ぎると女の女たる所以が無くなるからねエ、いつも言ふ通り乃公には妻として貞女の必要を感じない、戦國とか亂世とかいふ人事不完全の昔は知らず、まづ今日のやうに秩序的の世の中で、生涯連れ添ふ一人の可愛い女房に常態を失したほどの貞女立さすやうぢやア、もはや野郎殿の末路だ、迎も其貞女に醜いるだけの奮勵發達は覺束ないよ、忠臣の現はるゝは主家の亂るゝ時、人に過ぎたる孝子は多く不慈の親を持ち、世に珍らしい貞女は必ず意氣地なしの良人にあるもんだから、なるべく乃公も和女を貞女にしたく無い、たゞ妻らしき妻として白

髪がの末すえの婆ばあになるまで無事圓滿むじまんまんに送おくらしたたいよ、しかし件の如ごとき旦那殿だんなどの、いつ何時なんどき、唐突だんぱつに貞女ていぢよたるの不幸ふかうを冀ねがふかも知れないぜ、はゝゝゝゝとところで、まづ今日も貞女ていぢよの必要ひつえうなくて済すんだから、明日あすの世界せかいの來くるまで心持こころもちよく寐ねよう、寐ねる間あひだも人間じんけん生涯しやうがいの勘定かんぢやうに這入はるかと思おもやア、つまらない理由わけだが、儲たくわえまた起おきて働はたらくための休やす養やうと思おもへば安眠あんみんこれ即すなはち人事じんじ一般はんの資本しほん金きんだ、どりや金の茶釜ちやがまを掘ほり出す夢ゆめでも見みるから和女おまへも手傳てつだツてくれよ、はゝゝゝゝ」

其二

萩寺はぎでらの萩はぎもこぼれて痕あとなく吾孀あづまの森もりも枯かれて寂さびしく、妙見堂めうけんどうの鐘かねの音ねも霜しもに冴きえ龜井かめい戸どの朝詣あさまゐりに拍手かしての音おと寒さむく、まして其日そのひの車馬しやばに用ようなき柳島やなぎじまの冬籠ふゆごもり、まだ草屋くさやの軒のきに主人あるじの夢ゆめを包つんで雨戸あまども開あけず、厨くりやより立昇たちある天窓てんまどの炊煙けむりやうく白しらみ渡わたりて、前夜ゆうべ

のまゝの木枯に落葉を宿せし門前へ、何事ぞ俄に磨き立てたる人車の轆棒を降して訪ひ來しは例の黒田健次、おもへば汐入村の昔に膝小僧抱き寐の姿とこへやら、流石に青光りの初心ならねど大島紬の小袖ぞろりとして、あはれ一時は破帽弊衣に満都の衣香扇影を罵倒せし男、今は一見その華奢に靡いて人知れぬ浮世の薄闇に巢を構へつゝ、不生産的の動物一疋となり畢んぬ、

されど元來は讀書生の變化、泥の底より湧き出でたる奴ならねば、平生の横着漢も何とやら心に恥ぢたる體、こつそりと門を入りて蹙音も靜肅に聲さへ低く、折しも立出でし飯炊婆に對うて苦笑ひしながら、

「川上は居ますかね、何、まだ起きない、はて妙だな、あの朝起が今日に限つて、もし感冒でも引ッ込んだかね、ぢやア兎も角も細君に取次いで貰ひたい、黒田だ、黒田と言やア分るから」

既に眼は覺めたれど猶いまだ床のうちの良人に今朝の新聞を渡して、その間に朝食の用意せんと此方へ來かゝりし妻の芳子、ふと聲を聞き付けて思はず眉を蹙めながら、わざと浮べし微笑もろとも立出でつゝ、

「おや、まア大變お早くから、何誰かと存じましたに、さア黒田さん、どうか此方へ」

「このやア妻君、暫時お目にかゝりませんでしたな、時に川上まだ起きないさうですが、ちよいと急に話したい事があつて、わざと來たもの、さて起すにも及びませんから、どツか邪魔にならない隅ツこの方で待つて居ませう、もし舊の黒田なら例に依つて例の如く無遠慮に枕頭へ押し掛ける筈ですが、定めし萬事お聞き及びもあつたでせう、今ぢやア細君の手前、お恥もじさまの境涯でね、はゝゝゝ、實ア聊か肩身が狭く感じますよ」

「いえ、妾は一切、何も存じませんが、お見受け申せば以前と違つて大變お風俗の御立派な事、此頃は何處に、やはり御獨身で御坐いますの、ほゝゝゝ」

「やア細君、どうせ斬るなら一撃に斬つて下さい、さう弄り殺しのやうに遣られちやア苦しくつて堪らない」

「おや、御免遊ばせ、つい何の氣なしに伺つた事が、御意に觸つたやうで恐れ入ります」

「はゝゝゝ流石は川上の仕込で、近ごろ急に巧くなりましたな、つい何の氣なしに伺はれても、ぐつと身に徹へて腸に染み渡りますよ、もし此分で何等かの心算あつて伺はれちやア、とても助からない」

「ほゝゝゝ相變らず黒田さんは暢氣な事ばかり仰しやるよ、妾どもは此ごろ日々の貧乏世帯に追はれて貴君、濱町に居た時分とは、まるで別な人間になつて仕舞ひま

したから、ちよいと御覽なすつても、かはいさうなほど老けましたでせう」

「何卒もう其邊で許して下さい、いやはや油斷のならないのは晦日の勘定と牝の發達だ、や、こりやア失敬、時に細君なかく、便利に出來た間取の宜い家ですな、さぞ住み心地が宜いでせう、しかも近所隣屋は無し、うるさい世間の沙汰は聞えず、夜でも晝でも夫婦たゞ二人の差對で誰憚らぬ新世帯、好いた事をするにやア持つて來いの家だ、元來早起の川上が不思議に朝寢坊となつた所以、そもゝゝまた其邊に基く理由ちやア御坐いませんな、はゝゝゝ」

最初は多少その身の今の境涯を恥ぢて、何とやら言葉の端を慎むが如き體もありしが、元來うまれて無遠慮に出來たる奴、いつしか例の本性を現して、そろゝ無用の駄辯を弄しかゝれば、妻女すつと起つて奥の一間の良人が枕頭に聲を潜めつゝ、語るを聞いて、川上おもはず寢たるまゝに首肯きなから、しかも襖を隔て、聞ゆる大欠伸もろと

も、

「む、あの馬鹿が来たのかい、ことしの春こゝへ引き移ッて殆ど一年に垂んたる今更、のこく出て来るやうな奴だもの、うツちやツて置くが宜い、なアに和女、彼奴の事を正直に聞くから不可ない、わざく寝て起きて来たンぢやア無いよ、晝夜顛倒せる彼等の常として前夜の引ツゞきに遣ッて来たのさ、いつまでも待たして置け、しかし邪魔になりやア塵埃と一緒に掃き出して仕舞へ、まだ乃公は此まゝ合はして十二ページほどの新聞を読むから一時間の餘もかゝるだらう、はゝゝどうせ用の無い奴だ、いくら待たしても構はないぞ」

わづかに襖一重を隔て、罵倒喝破の聲、手に取る如く聞ゆれば、流石の横着漢も思はず満面を皺めて針の筵に坐せし心地、あまりの氣の毒さに妻女も今更ら奥の一室を出で兼ねつゝ、そのまゝの無言に打ち捨てられし黒田いよく死毒を舐めたる顔色、居

るにも居られず去るに去られぬ苦し紛れの折も折柄、門の戸がらりと開いて激しき下駄の音もろとも破鐘に等しき上田力の聲、

「やア珍らしい奴が來てるな」

南無三寶、はツと驚いて振り返れば、昔ながらの上田先生、はや山の如き二十貫目の大兵を悠々と運び入れて黒田の面前に仁王立のまゝ、じろくくと見下す眞丸の大眼何とやら悲憤の色を帯びて薄氣味わるく、一反の木綿着に短き袖口より太く差出でたる力腕の大拳、しかも固く握り詰めて今にも大喝一聲の下に飛び來るかと思へば、一時に五體の縮む心地して、いよく物凄し、

「おい黒田、今、門前で車夫に聞いたが、なか／＼貴様ア大變な出世したな、烏森の水月といふ待合の旦那を御供して來ましたとは妙だ、しかし川上も細君も居ない火鉢の前で貴様一人、しよんほりと何をしてる、全體また何の用あッて當家へ來たン

だ、なるほど考へて見ると思ひ當る事があるわい、過日、乃公が芝の公園から歸途あの吉田に出喰はしたのが烏森だ、如何にも變に思つたから何故こんな家を知つてと言へば、同窓の卒業生が親類だと答へたが、は、ア、今まで乃公一人に祕して居つたんだな、また今日こゝへ来るからは川上夫婦も承知の上か、但しは貴様が恥辱も外聞も顧みず不意に押し掛けて來たのか、まづ其事を言へ、乃公は乃公で別に料簡があるから」

「や、どうも上田、さう言はれると實に面目次第も無いこつた、しかし事こゝに至りし結果には、いろく混み入つた理由があるから、まア坐つてくれ、泥は呑んでも黒田健次はまだ腸の底まで腐らない、只これ人事蹉躓の失敗また失敗を重ねし行路に對する一時の權謀だ、いくら僕だつて君等と共に汐入村の苦學十年を経來つたもの、まさか待合の亭主で生涯の目的は甘んじないよ、は、は、は、は、」

「馬鹿野郎、生意氣な事を言ふな、泥の中で清淨を保つたア蓮の花だ、君等と共に汐入村の苦學十年は經來つたとは貴様、恐れ氣もなく誰に對つて吐く一言だ、人事蹉躓の權謀は淫賣宿の亭主より外に無いのか、こら黒田、世の中の策にも數にも盡きた、曉は死といふ簡易輕便な手段があるぞ、この死に損ひめ」

「おい上田、そりやア君、あんまり酷いぜ、みづから心に顧みて多少の恥づるところあり、また由來骨肉に等しき友誼に對すればこそ、この黒田が斯くの體だ、もし他人をして今の君が如き言あらしめば、何、承知するもんか、徒らに物の一端を固守して全體に通ぜざる杓子定規の徒が、いくら屁理窟を放り出して無効だよ、觀じ來れば古今ともに人間の行爲所業それ何の清濁かある、是非善惡は東西南北の方角に等しいもんだ、西へ行くも東へ行くも其人の勝手だ、自己の南するがため他人の北に走るを嘲り笑ふの理はない、もし國家の經濟を維持し社會の機關を運轉する上

から言へば藝妓も待合も亦これ一の營業税を拂つて公認の權利あるもんだ、むしろ
 偷食の逸民よりは優勝だらうと、まアかうも言ひたくなるさ、ねエ君」
 「黙れ、控へろ、咄この俗物め、自己が身の臭も知らずして叨りに何をか囀る、社會
 に盜賊を殺さざる所以を知つてるか、營業税を拂つて公認の權利ありといは、淑徳
 の賢夫人よりも醜の醜たる小店の端た女郎が國家のためだ、事の是非善悪は措置い
 て物の裏表も満足に知らない貴様が、いや西の東のと浮世の道路に對する方角呼は
 り僭越の至極だ、第一また待合家業と言やア野郎の南瓜面で濟まぬ筈、どうせ何處
 の牛の骨か馬の骨か正體の分らない奴と野合つた結果だらう、全體どんな阿魔と孳
 尾んだのだ、白狀しろ、しないと吐しても貴様、この點に於ては上田力、ぶち申し
 ても白狀さすだけの理由があるぞ、貴様が今の家業に絶えず聽く藝妓の爪弾と、か
 の島女が、忘れもすまい、あの貞女が、霜夜に泣く音を絞つて唄うた門三味線と、

畜生め、どツちが宜いか、さア言へ、返答は貴様の口にあり鐵拳こゝにありだ」
 襖一重を隔て、上田と黒田とが互に劣らぬ激論舌闘、あはや今にも起つて打合はんば
 かりの勢ひなれど、主人の川上三吉たゞ平然として蚤一疋に太股を這はれたる顔色も
 なく、靜に寢たるまゝの枕を敬て、微笑を含めば、妻の芳子なほさら氣を揉んで頻り
 に聲を潜めながら、
 「ねエ良人、早く何とかかなさらないと大變ですよ、あれ、あの權幕ですもの、さア良
 人」
 「まア宜いさ、捨て、置けよ、なるほど段々と激しくなつて來たな、いや面白」
 「そんな良人、暢氣な事を仰しやつては困りますよ、事の善悪は措置き、もし雙方ど
 ちらに怪我があつても濟みませんもの」
 「なアに大丈夫、心配するに及ばない、よしまた少々怪我ぐらゐあつても宜いよ、

いざ組打となれば黒田の奴め、どうせ上田に叶はないから横面の二つ三つ喰はされ
て此處へ遁け込むに相違ない、其時この乃公が始めて何とか言へば済む結局だ、ま
づそれまでは關せず焉、第一あの黒田は遣られて宜い奴だ、今まで上田に遣られな
かつたのが不思議な奴だ、しかし五尺八寸二十貫目の大力が烈火の如くに憤った鐵
拳、痛いぜ、なか／＼徹へるぜ、流石の横着野郎も眼を白黒にして、ぎゆうと悲鳴
るだらう」

「それでは猶更の事、現在こゝに夫婦とも居ながら、おや、ますます激しくなつて來
ましたよ、そら上田さんが、あれ黒田さんも良人、もう今に始りさうですよ」

「ぢやア和女だけ、そつと庭の方から臺所へ廻つて居ろ、なるほど斯んな時に女が平
氣で居ちやア、あんまりだ」

「しかし良人、寢て在らしつて大丈夫ですか、もし頭の上へ組み合つたまゝ倒れ込ま
れて」

「相手は上田だ、共倒れの氣遣ひなし、事に依ると黒田め一人で抛け込まれて來るか
も知れない、さア早く行け、形勢いよく迫つて穩かならん様子だ」

妻女そつと庭より立去るや否、忽ち聞ゆる大喝一聲、この野郎と叫ぶ聲もろとも、隔
ての襖を押し倒して轉け込んだる黒田に續いて追ひ込む上田の猛勢、川上おもはず中
央に首を持ち上げて左右を見返れば、横槌大の握拳を固めて仁王の如くに立つたる
體と、顔色を失ひ身を縮めて猿の如くに蹲踞つたる體と、兩々相對して暫し無言のま
まに睨み合ひぬ、

「おい上田、兎も角も、まア坐れよ、もし彼奴を打つの必要がありやア乃公も手傳つ
てやるから、はゝゝゝ」

「いや川上、此場は僕に任して置け、あの野郎、今日といふ今日は許さなのだ、道理

で分らない奴は鐵拳を喰はすより外にないから、畜生、この上田が十餘年來の友達
 甲斐に息の根の止るほど、ぶち伸してやる決心だ、ついでに絶交の證左だ、さア淫
 賣宿の亭主これへ出ろツ」

「なるほど、しかし上田まア待て、そもく彼を打つの價値ありや否やが先決問題だ、
 ところで黒田、や此奴め、何といふ状態だい、平生の口の十分一もありやア、も少
 し度胸を据ゑて男らしくしろ、まるで空巢規ひが遁け損ツて塵塚へ追ひ詰められた
 やうだぜ、は、は、は、それでも貴様、家へ歸ツて彼女を相手に鼻唄ぐらゐの勇氣はあ
 るんだらうな、實際もう一拳二拳、くらツたのか」

「おい、川上、よせよ、相手が相手だ、洒落れずに何とか治めてくれ、あの前世紀
 の蠻力で横面の二拳三拳、實際に喰ツて堪るもんかい、この野郎と叫んで鐵拳飛下
 の一刹那、すツと身を翻して一足飛びに遁け出したのだ、は、は、は、笑ツちやア濟

まないが、兎も角、野蠻沙汰だけは止めてくれ、外の奴なら僕だツて恐れないが、儲
 あの二十貫目もある圖體で君、あまり感心しないよ、第一ぶたれて怪我をしても文
 句の持ち込みやうが無い相手だからなア」

「かういふ奴だよ上田、一つ間違へば面が横に引曲る筈の今この場になツても、ま
 だ悪まれ口を聞くやうな奴だから、ぶツたツて仕様がな、まア乃公に任せろ」

「ぢやア君に任すから、しかし野郎、遁さないぞ、こんな時を幸ひ、骨身に染むほど
 喰はして置かないと盲蛇の凡俗、くせになツて何をするか知れない奴だ」

「いや遁けないぞ、何、遁けるもんか、そもく遁け出すべき理由も弱點も無いんだ
 が、つまらない蠻勇の衝に當るも愚の至極だから、君子こゝに暫く暴を避けるのみ
 だ」

「こら黒田、貴様また餘計な口を叩くよ、黙ツとれ、現在こゝまで遁けて來たぢや

アないか、もし乃公が居らなきやア目でも舞はす奴が、暴を避けるの君子のと何を吐すんだ、うかくすると乃公が第一番に喰はず、なれるだけ其處で小さくなつて居れ、上田と合議上、今に宣告文を與へてやるから」

「は、は、は、は、まるで罪人扱ひだね」

「知れた事いへ、貴様が青天白日の下に大手を振つて歩ける奴かい、よく考へて見ろ」

上田を押へ黒田を叱して雙方もろとも左右の座に着かしめし後、やうく夜具を這ひ出でて手を叩きながら、妻女を呼んで微笑を含みつゝ、

「和女ね、暫時こゝに居て調和的に茶でも出してくれ、上田は兎も角、この黒田は無宿の彪犬と一般、もはや大丈夫と思へば猶更いよく吠える奴だから、よく氣を付けて間違ひの無いやうにしろ、宜いか、乃公は其間に顔を洗つて來る、は、は、は、は、は」

いつにない朝寐坊をして、とんだ面倒に舞ひ込まれたよ」

あはや一陣の風雨を卷いて落し來らんとせし雲行も、やうく晴れて暫しの軒に日影を待つ體、かゝる時には男よりも女の優しさ、良人に代りし妻女おもはず微笑を洩らしながら、等しく雙方へ茶菓を進めつゝ、

「上田さんも黒田さんも御兄弟同様の交情で、まア、どう遊ばしたの、あまり呵しいぢや御坐いませんか、は、は、は、は、は」

いひつゝ先づ上田を見れば、たゞ差俯いて無言のまゝに両手を組めるのみ、されど黒田は例の横着面を振り上げて苦笑ひしながら、

「やア細君、どうも濟まないこつて、は、は、は、は、は、なアに萬事、この黒田が悪いんですよ、悪いから、なるべく平生の流を差控へて、殆ど死せるが如くなつて居たんです、その前世紀殿どういふ調子の腹の蟲の居處が間違つて居たか、だしぬけに細君

この野郎と叫ぶや否、牛のやうな身體を躍らして来たから、こいつア堪らないと思はず飛び上ツて遁け出しましたよ、まして十餘年來の今日まで會て怒ツた事のない先生ですから、實に驚きましたね、しかし考へて見ると何、決して遁けるにも驚くにも足らないこツて、いはゞ一場の滑稽さ、いくら上田でも川上の家と思へばこそ、まさか花見時の茶番めいて往來の中央ぢやア斯んな藝を遣れますまいよ、だから上田のためにも擲れなかつたのが幸福、此方も打たれなかつたのが幸福、つまり雙方お互に怪我が無くツて幸福さ、ねエ細君、どうだ上田、もう宜い加減に和睦せうぢやアないか、これが汐入村の昔で寢ても起きても丸裸一貫の時なら兎も角、君だツて今は浮世に妻子を持つた重荷の身だ、僕だツて是、もう三十の上を幾何といふ年だ、あんまり暢氣に若返り過ぎたぜ、は、は、は、川上の來ないうち早く打解けて、和解親睦の功を細君に捧げようぢやアないか」

よく／＼自己が不覺と思へばこそ、これほどの横着漢も、そろ／＼我を折ツて下手に這ひ出せど、上田は猶そのまゝの無言に差俯いて言葉なければ、黒田おもはず膝を進めて、

「ねエ、おい、上田、何とか言ツてくれよ、喧嘩は喧嘩、情は情だ、今更ら知れた事をいふやうだが、お互に一朝一夕の交際でなし、由來こゝに幾度か集散離合もしたが、儲、きのふ今日の出來た鼻頭の理由ぢやア無し、いはゞ深い因縁だ、僕が悪けりやア謝るから、まア厄介な奴を同胞に持ツたと思ツて堪忍してくれ、する業が氣に入らずば、どんな事があツても來て貰へないと僕は覺悟してるさ、しかし君、をりをり僕の方から訪うた時は、やはり舊來の黒田と思ツて心持よく交際ツてくれ、糟糠の妻を堂より下さずんば、醜は醜なりと雖も十年の友を君、せめて門前拂ひにしないぐらゐの雅量を頼むぜ、ねエ上田」

「えッ喧しい、靜肅にしろ」

一言の下に喝破すれども、流石に上田は昔ながらの上田、山の如き眞丸の肩に首骨を埋めて悟り損ねし達磨に似たる兩眼より男泣きの涙、ほろ／＼と滾しぬ、

中間を隔てし川上の妻女も、上田が元來の性質と無言の心中を察して、何とやら物の哀れに打たれつゝ、其まゝ差俯けば、流石の黒田も男泣きの涙一滴に自己が千言萬語を閉ぢられし體、たゞ默然と額越に眼を敏て、見れば、上田いよく頭を垂れて總身の息ほつと吐きながら、

「あゝ一人の友達を失つた、どうせ満足に正路を歩む奴たア思はなかつたが、つまり乃公のやうな愚物でなし魯鈍でなし、逆境も失敗も人生いつまで續くもンでなし、時が來て身さへ立ちやア寧ろ才氣横溢の一奇漢、凡流以上に突出すべき男と樂しんで居たに、畜生め、淫賣宿の亭主になるたア何のこつた、しかも路傍に半文の

價値なき牛馬の骨を拾つて來て、かの貞節可憐の島女が靈を地下に泣かしむるとは咄々無情の没理漢め、貴様が本所の裏長屋に九死一生の時、そも／＼誰が血の涙で介抱してくれた、また其貞婦が暮れ行く春の花と共に散り際の瘦せた手で貴様の膝に取り付いて何と言つた、草葉の蔭より行末は待合の亭主になるのを待つて居るとも言ひ遺したか、現在この上田に對つて彼女は定命でない僕が多年の苦勞に弄り殺しをしたんだと吐したぢやアないか、こら黒田、あの貞女が死際の遺言中に上田さんへ宜しく傳へてくれとの一言、其、そゝ其一言で乃公は今日まで貴様のやうな奴を庇護つてやつたんだぞ、十餘年來の骨肉同然で何の隔意ないとはいふもの、倉橋にも川上にも萬事遠慮して氣兼ねして、連れ添ふ嗅アの手前まで陰になり陽になり、どれほど貴様のために苦しんだか、考へて見ろ、しかし、もはや無効だ、今更ら考へても無効だから、今後ますます其醜を恣にして勝手にするが宜い、これほ

ど思ッた乃公を馬鹿にして、あれほど盡した貞女の靈に糞をぶツかけ、倉橋が折角の芳志を淫賣宿の資本金に投じ、川上に見放され吉田に憫笑せられた貴様の前途が見物だ、まア生命あッて出来るだけの白癡を仕抜くも宜からうよ、は、は、は、時に細君、今日は此まゝ歸りますから川上に宜しく言ッて下さい、別に用があッて來たンぢやアなし、此上また彼奴のため無益な口を利いたり聞かされたりするも嫌だ、嫌と思へば見るも眼の汚穢だ、糞土の奴は我より去るに若かず、どりや歸らう、貧なれど我家に歸ッて其分に安ンじ、美ならねど我妻の厚き情に迎へられ、珍しからねど我子の清き愛に慕はれて此不愉快を慰すべしだ」

いかに言葉を盡しても一切さらに聞く耳持たぬ體、もし手をかけて引き止めなば掻い擱んで抛け出すべき顔色、ぬツと身を起して無言のまゝに見返りもせず、悠悠たる大兵肥滿に木綿着の手足を現し、まだ霜消えぬ日影の小石に缺けたる下駄の齒音を響か

して立去りぬ、

上田の立去るや否、主人の川上三吉、やう／＼出で來りて吹き出す葺の煙もろとも、手持無沙汰の妻女を見返りつ、惘然たる黒田に對ひながら、

「どうだ、よほど酷く遣られたな、しかし上田が言々句々、さらに巧妙なところは無いが、悉く至誠の肺腑より出でて思はず人を感泣せしむるに足るね、いかな貴様も少しやア冷汗を流したらう、實は早く出る筈だったが、何だか情に迫ッて其まゝ出損ツたよ、また上田を引き止めようかとも思ツたがね、あゝいふ男だから寧ろ自由に任して置いたのさ、なれど黒田、貴様ア此分で濟まないぞ、たとひ上田が捨て、も、由來の交情恩義、たゞ捨てられたで濟む黒田ぢやアあるまい」

「いや眞實だ、なアに僕だッて自分が今の境涯と上田の性質を知ッてるから、あゝ怒らす筈ぢやア無かつたが、つい妙な工合で、變な調子で、をかしう張合が乘ッて來

てね、實に悪かつた、なるほど玲瓏たる珠玉の如き上田の潔白ぢやア、この黒田を鬼畜に等しい魔道にでも墮ちたと思つたらうよ、ねエ、ところで差當つての善後策いは、謝罪の手段を全體どうしたもんだらう、今日すぐに此ま、押し掛けて往つても先生あの權幕、なかく、寄り付けない、しかしまた、いかなる禮を以て迎へても僕の巢へ來る筈は無し、こゝは是非とも君、君の力を借らなきやア迎も無効だ、もし一步を進めて忌憚なく露骨に言へば、やはり人おのゝ其意志に依つて東西南北すべき僕の持論で、彼は彼たり我は我たりだがね、儲あの上田に對しては大きな面して彼も我も言へない僕の身だ、かつまた事實あゝいふ人間を、あれほどまで怒らしたまゝぢやアいくら横着な僕でも何だか氣にかゝつて、罪を犯したやうで、寢覺が悪からなア」

「はゝゝゝさう聞いて見ると、まだ貴様も墮落しきつて居らないところがあるやうだ、よし、ぢやア今夜、乃公が上田を訪うて貴様のために辯解の勞を取つてやらう、ところで以後は一切、斷じて上田に毒口を利く事ならんぞ、否、誰に對つても口を慎め、わけて貴様の口は禍災の基だ、口さへ慎めば多少また茶人の掘出に預つて面白いとか何とか言はれる事もあるさ」

「こりやア恐れ入つた、とても眞面目な人間に洩も放ツかけられないといふ理由だな」

「無論よ、茶人も茶人に依りけりで、その道の一流を心得た宗匠の鑑定に掘り出される筈は無い、まづ出來損ひの幫間と骨董屋を兼ねて嫌に曲つた物ばかり竝べたがる生嚙りの似非茶人に掘り出される器だね、はゝゝゝ時に今日は珍しく朝ッぱらか乃公の家へ何の用で來た、牝鳥の羽を伸す家業柄、また過日のやうな摺み合を遣ららかに叩き出されたんぢやア無いか」

「や、驚いたな、さう君、いちく取ッて押へて罵倒されちやア、いくら差迫ッた要用でも出し場が無くなッて、このまゝ歸るやうな事になるからねエ」

「宜しく其まゝ黙ッて歸るべしだ、どうせ社會の組織外より來るの用、ろくでもない事に極ッてるさ」

「いよく不可ない、ぢやア今日は黙ッて歸らう、こんな時に何を言ッても無効だ」

「今日に限らず、いつでも無効だぞ、上田の鐵拳で横面の曲らなかつたを僥倖にして早く歸るが宜い、しかし黒田、ちよいと貴様の車夫を借りたよ」

「僕の車を、何時、僕の乘ッて來た車は門前に待ッてる筈だが」

「待ッて居たさ、しかし乃公が起きて顔を洗ひに往ッた時、ふと思ひ出した用があッて濱町まで使者に遣ッた、勿論、わざくゝまた引ッ返して來るも可愛さうだから其まゝの道順で烏森へ歸れと言ッてやッた、はゝゝゝ、辻車に乗るなり、てくゝ歩

くなり、そりやア貴様の勝手だ」

「いやはや、重ねぐゝ痛み入ッて何とも申し上げやうのない始末だ、實に驚いた、かうして見ると、いくら怒ッて拳固を振り舞はしても上田の方が遙に與みし易い、君の如きは變幻出沒、なかゝ油斷も寸隙もならない方だからなア、わるく言へば、喰へない人間だ」

「喰へても喰へなくッても宜いから、まア早く歸れよ、邪魔だ」

「居ても居なくッても關はないと言はれるより、邪魔に見られる方が多少まだ物のある理由だね」

「さうだゝ、さう思ッて居りやアこそ、づうぐゝしく生きて居られるんだ、早く歸ッて彼女の御機嫌でも取れ、根が浮草の水性だ、うかゝると盜まれるぞ、今度あの女に見放されたら貴様、もはや世の中に立つ瀬があるまい、苟も堂々たる一個

の男兒が藝妓あがりの女郎一疋に生殺與奪の權ありと思へば、實に惘然な奴だ、な
 さけない人間になつて仕舞つたよ、女髮結の亭主と待合の主人は男妾も同然だ、
 しかし貴様の面ぢやア義理にも堪忍にも色や戀で成立つ筈が無いから、外に何か人
 の知らない用があるんだらう、その用さへ濟めば無縁の他人、頭上から鹽花を振り
 掛けらるゝ理窟だ、用心しろよ、はゝゝゝ」

「謹んで君の好意を謝す、されど大隠は市に忍ぶの諺、世を金馬門に避けた洒落者も
 あり、君子に似たる小人の多き當世、豈また小人に似たる大物なからんやだ、巍々
 たる今日の大夏高樓に却つて不思議の伏魔殿あり、楚々たる柳影の蘇小が家に寧ろ
 一個の神仙園あり、乞ふ君、暫く僕をして竹枝吟中の人たらしめよと言ひたいね、
 はゝゝゝ、妄言多罪、兎も角謝つて置いて、儲そろくと歸らう、否、てくくと
 歩き出さう、時に君、上田の事だけは眞面目に宜しく頼むぜ、なるべく骨を折つて

慰撫してくれ、矢でも鐵砲でも恐れぬが彼奴の涙と情と腕力に對つちやア實に閉
 口だ、せめて世間普通の腕力なら先刻のやうな場合、横面の一拳ぐらゐる神妙に受け
 てやりたかつたが、あの怪力ぢやア君、全く危いからなア、はゝゝゝ」

「何でも宜いから、早く歸れ」

「歸るさ、ぢやア頼むよ上田の事を、けふ來た僕の用は後日また改めて、や、いつの間
 か細君の姿が消えて無くなつた、つまり蒼蠅といふ理由だね、しかし挨拶は挨拶
 だ、よろしく言つてくれ、一度ぐらゐる遊びに來て貰ひたいもんだね」

「無禮な事いふな馬鹿、乃公の鼻アは清淨無垢の處女から正當の妻となつたもんだ、
 鳶にも鴉にも突つ付かれた貴様の情婦風情に近寄せて堪るか、神聖を瀆すの恐れ
 ありだ」

「なるほど、こいつばかりは場數者より初心者の方に有難味があるやうだな、しかし

此頃は、よほど浮世に馴れて来て、ちよいと世話女房といふ異なる體を備へたらしいね、いはゆる今が膏の上ツた女の眞盛りだ、大事にしたまへ、はゝゝゝ」

其三

杓子定規と屁理窟は聞いて用なく、臍の穴と猫の尻尾は無くとも濟むべき筈、野暮と化物は相手にならず、蜂は逆倒に家を作つて自由に飛び歩き蟹は眼球を捧けて恣に天下を横行するの凡例、そもく活きた人間が蠶と等しく一枚の蓆に限られ一個の繭に身を縮めて堪るべきやと、道理を外れた道理に自己たゞ一人が得々として、あたりに年の南瓜面に何をか悟りめいたる例の黒田健次、苦學十年の曉に泥を呑んで一切さらに惜しまず、百年の生涯に一盃の酒も得飲まぬ他を笑うて、酔醒の鼻唄まじりに好いた女の爪弾を聴きながら、おい浪の花を湯に入れてくれとは、いつしか夢の浮世に寄

生木の狂ひ咲き、どうしても實の生らぬ奴なり、

されど本人これが實のあるところと濟まし込んで、毛繻子の袖口も満足に手を通した事の無い男が、絲織の温袍に黒八丈の長襟かけて、磨き立てたる如輪木の大火鉢を昔の机に代へ、宗教一切を絲瓜の皮ともせざりし無神論者の骨頂が小兒の玩弄具と等しき神棚の下に座を占めて、一時は天下國家を奈何せんとの頭腦に今は今夜の客の懷中奈何と胸算用の境涯 山の芋が化けて鰻になるよりも迷うて踏み込む人間の變遷うた

た更に恐ろし、

是非の顛倒、晝夜の裏表、いづれも世の常に逆に楫とる朝寢は却つて繁昌の基、眼が覺めて顔を洗へば煙草一喫の間に半日を過して、はや晝飯の膳の上にも酒なくては物足らぬ體、ほろりと酔うて湯に入りつゝ濡れ手拭の乾きしころは午後三時、また肱を枕に轉び寢の折しも、眉うち顰めて小婢が差出す名刺一枚、何心なく手に取れば、新

聞紙の白き欄外を切り抜いて筆太の墨まツ黒々と上田力の三字を現しぬ、
 流石の黒田おもはず起き直ッて、無言のまゝ、額越しに天井を睨みあけつゝ、
 階の奥の一室に通せとの指圖、心得て立去らんとせしを再び呼び返しながら、
 「萬事に氣を付けて、なるべく丁寧にしろ、そして茶も菓子も上の部だ、善いか、風
 俗は龜末でも人間を龜末に扱ッちやア不可ンぞ」
 さア大變だ、いよく押し掛けて來た、昨日あれほどの事ありし今日、まさか打解け
 て、來るとは思はざりしに、さては前夜の川上が善後策、あまりに效を奏し過ぎて今
 更ら有難迷惑の體、また何とやら薄氣味わるく、おもはず腕を組んで小首を傾けし鼻
 頭へ、家業の采配とツて切り廻す女將軍、人知れぬ内證は縁でこそあれ、心と心の底
 は兎も角も、面だけ見れば黒田の情婦に勿體なし、

「ねエ、今あの二階の一番へ通したのは全體、ありやア何ですの、あんな人を通す時

は良人、いちくゝ妾の耳へ入れた後に仕て下さらないと困りますよ、まるで土左衛
 門が生き返ッて來たか相撲取に成り損ッた喰ひ潰しのやうな圖體で、しかも横柄で
 第一その風俗ッてば、ほッと出の山男にも今時あんな無様な人足は居ませンよ、世
 間體の悪い、家業に觸りますよ、もし外に大切の客筋でもあッたら何といふ心算で
 す、それこそ家の估券が落ちますぜ」

「何だよ喧しい、夜の忙しい時なら格別、宜いちやアないか晝日中の閑暇な時だから、
 あれでも立派な人間だ、苦樂を共にして來た乃公の舊友だ、化物が舞ひ込んだやう
 にいふない」

「何も吝々いふ理由ぢやア無いんですが、お友達はお友達、お客様はお客様、晝に
 關はらず部屋と座敷を混合にされては困りますよ、その代り喰ッたり飲ンだりする
 事だけは思ふ存分になさるが宜い、しかし彼お友達もまた、過日のやうに最初は啞

「さうとも、鱧の丸煮だ、酒で痛めて置かないと危険だ、ついては手を鳴らすまで誰も来ないやうにしろ、もし呼んだら和女、ちよいと挨拶に出てくれ」

「嫌ですよ、眞平御免蒙りますワ、さんざ御馳定した上、ぶたれでもして御覽なさい、良人のお友達には先達の川上さんといふ人で、しみぐり懲りて居ますもの、しかしあの川上さんは無遠慮で小面の憎い中に調子の捌けたところがあつて、どツか男らしい苦味走ツた異な人です事ねエ」

「どうだ、乃公と比べて」

「よほど最良目で見たとところが、まづ四分六でせう」

「どう四分六だ」

「無論、先方が六分ですよ」

「こん畜生、ふざけるな、あやしいぞ、さういふ料簡なら幸ひ二階の奴に暴れさして

やらうか、自棄ッ腹に乃公も手傳ツて」

「さア〜御勝手次第」

英雄たまく〜兒戲を學ぶの滑稽あれど、これは浮世の自墮落に迷ひ込んだる輕佻浮華、根も葉もない癡話を残して其まゝ二階へ上り行けば、上田先生たゞ一人、八疊の中央に黙然として石臼に等しき大胡坐、茶も菓子も飲まず喰はずに兩腕を組んだる體、いづもながら面壁の達磨に似たり、

「やア上田、昨日は實に、はや何とも申譯の無い失敬した、川上が昨夜、君の家へ往ツたらうな、しかし能く来てくれた、まさか今日、来てくれるたア思はなかつたよ、ところが今、ちよいと話しかけた客の奴め氣が利かないから、つい待たした理由で、や、坐蒲團がないね」

「ある、尻の下に敷ッ込で仕舞ツたから見えないんだ」

「なるほど尋常人の坐蒲團ぢやア君の尻蒲團だな、は、は、は、しかし来てくれたのは何よりだ、よく来てくれた」

「まだ貴様、さう心持よく来たんでないぞ、たゞ川上の言に依って、しぶく来てやツたんだ、来るまでは途上の感慨さのみでもなかつたが、さて来て見ると貴様の面が、また癩に觸る、なぜ貴様ア骨肉にも優る十餘年來の知己をして面みるや否、すぐ癩に觸らすんだ」

「どうも君、昨日といひ今日といひ、さう頭上から疊みかけられちやア聊か憫然だよ、昨日は昨日、後日は後日、まづ今日だけは堪忍してくれ、折角かうして来てくれたンぢやアないか、悪木も花咲かば斧を入れざるの諺、ねエ君」

「ふ、ふ、相變らず口の減らない奴だ、寧ろ貴様が乃公のやうな無意の愚鈍に出来ると却って斯うもなるまいが、憐れむべし俗物の奇氣横才、狂奔馬を火事場へ追ッ

放したやうだ」

折しも小婢が持ち運ぶ山海の珍味かすくを、路傍の小石とも感ぜざる上田先生、じろりと冷かに見遣りながら、

「おい黒田、こりやア何だ、誰か外に客でも来るのか」

「は、は、は、まさか毒も這入ってないから、まア一盃、飲んでくれよ、久し振だ、ただ面を見合ッて居たばかりぢやア、ますく陣立が改ッて敗軍の將いよく窮するからねエ、いは降參の證に聊か領土の物産を獻する理由だ」

「その領土が領土だから折角の物産も有難くない、しかし見たばかりで階下へ降すも酷だ、ぢやア少々ばかり飲んでやらうかな」

「なさないこつたなア、わざく御馳走をして、謝ッた上、恩に着せられて」
「知れた事いへ、これが貴様、正當の道で得た境涯なら、荒席に等しい破れ疊の上で

腐った鱈の骨を焼き直してくれても、乃公は舌鼓を打って有難く賞翫するんだ、もし其日を送りかねて居りやア三度の飯を二度にしても貴様の家へ米を持ッて来て愉快に談ずる乃公だぞ、よく考へて見ろ、しかし前夜、川上の説に依ッて、もはや貴様を濟度する事が出来ないと斷念したから、實ア今日、暇乞ひに來たんだ、由來こゝに十有餘年の貴様と乃公、その交情友誼の最後を告げに來たんだ、つまり貴様を呼び付けて絶交する筈だが、乃公の鼻アに對しても餘り大きい面の出來ない貴様のこツたから、また少しは面目を思ッてやッて、わざと來たんだぞ」

「實に濟まない、汗顔の至極だ、しかし君、絶交は酷いね、あんまり手厳しいな」

「乃公が絶交するンでない、貴様が絶交さすんだ、よしまた交際を絶ッても宜いちやアないか、淫賣宿の友達に乃公のやうな野暮漢の必要なし、また頑固愚鈍の乃公が友達に淫賣宿の亭主を持ちたくない、穩和に言へば自然が雙方を隔離する所以だ」

「いや、さう遣られちやア一言もない、今こゝで千言を盡しても無効だから、まづ暫く他日を待ッて」

「は、は、は、他日ますます無効だぞ、しかし絶交の二字を以て淫賣宿を廢せとは迫らない、また迫られて廢す貴様ぢやアなし、その點は前夜、川上の説に依ッて飽くまで承知してゐるから、たゞ以後は一切、互に關せず焉といふこツた、時に黒田、貴様の今の情婦なるもの、どんな女か、ちよいと後刻で見せろよ」

「は、は、は、どうも恐れ入ッたな、しかし君、是非とも見て往ッてくれ、敢て君の不快を重ねる理由でない、見るといへば見て貰ひたいんだ、もし君が眼で何女かに似て居ッたら上田、どうする」

「どうするもんか、醜交の片相手たゞ面を一目みてくれるのみだ、貴様が川上への辯解中に其、その女が死んだ貞女に瓜兩斷と言ッたさうだが、それほど可憐の島女に

似て居れば猶更ら以て貴様の罪が重いぞ、戀しい面影に出逢へば忍ぶべからざる心を忍んでこそ、亡せし戀人への申譯だ、宵て居るがため迷うたとは一の饅頭を失つて一の饅頭で泣き止む小兒と一般、理に於ても情に於ても寧ろ亡妻を忘れ果てた所以だ、しかし今こゝで何と言つても貴様の耳に入るまいから、乃公は別に乃公の料簡で、宵たといふ其女の面を一目みた上、久しく草叢に埋もれた彼島女の墓を掃うて一片の涙に回向をする眞情だ、あゝ乃公が島女の墓の前で人知れぬ男泣きの涙を絞る時、貴様ア其女の膝枕で鼻唄まじりの洒落でも癡話でも勝手次第に好きな白癡を盡せと言つたところが、平氣で盡す奴だから、もはや道も論もあつたもんでない、なるほど淫賣宿の亭主となつて得々たる理由だ、はゝゝゝしかし滑稽だな、貴様でも急に凋れて差俯く事があるから、何を考へてる、おい黒田、どうした」

「君のいふところ實に涙の賜物だ、いちゝ腸に徹して熱湯を呑むが如くに感ずるが

さて上田、手段は目的を辯解するの一言で許してくれ、今こゝで此業を捨つるに忍びない故でも無い、また今こゝで一人の女を棄つるに忍びない故でも無い、淫賣宿淫賣宿といふが君が、もし君が父兄の如くに信頼する彼川上三吉をして一朝それ賭博師となるの變化あらしめば君、そもゝ何とする」

「むゝ貴様、捨鉢となつて、そろゝ乃公に喰つて掛るな、盜賊は却つて盜賊を恐るるの凡例、おのれの汚れた心に他の心と比較べるとは馬鹿太い事をいふ奴だ、貴様の淫賣宿は現に然り事實に於て然り、川上が賭博師に、何時なつた」

「いや、既に、なつたとは言はない、しかし或は君、なるかも知れないぜ」

「なるかも知れない、はゝゝゝその證據でもあるか」

「ある、確實にある、正にある」

「あるウ、この野郎、苦し紛れに妙な事を吐すと、今度こそ満足で濟まないぞ」

「いや眞實、あるんだ、實ア僕が此家業を始めるに就いて、もはや一切、誰にも面會ない覺悟で居ったが、ことしの春、ふと臥龍梅で川上に見付けられ、其後また取ッ捉ッて酷く遣られた時、その言中に君、かういふ事があつた、貴様が待合の亭主に墮落して由來の知己に交際を絶たるゝのは當然だ、しかし乃公が賭博師となれば謹嚴の倉橋にも潔白の上田にも質直の吉田にも一言の嘴を容れさせないのみか、寧ろ却ッて感歎稱美の膝を打たしむると、だがね上田、その時は只この僕に對する憤言と思ッて居たさ、ところが何ぞ圖らん、事實だ、決して一場の憤言で無かつた證據が僕の手に這入ったから驚いたね、流石の僕も一驚を喫して車を飛ばしたのが即ち昨日の朝だ、ところが川上はまだ起きないで惘然と待ッてる僕の頭上へ忽ち君の鐵拳飛來といふ騒動さ、どうだ上田、何と考へる」

「む、いかにも變だな、して貴様どういふ證據が手に入つた」

「實アね、をりく、此家へ來る客で、當時まづ都下に一二といはれる遊人の親分株がある、しかも其奴が君、袁彦道の神と稱せらるゝほどの奴で、文明の今日なほ依然として昔のまゝの俠客肌を保ッてる有名の男だ、ところが近來その男の許へ出て來て、賭博の道を教へてくれと言ひ込んだのが君、川上だ、大膽にも柳島の町名番地を確實に書いた名刺へ立派な音物まで添へて來たから、流石の奴も驚いて、最初は狂者かと思つたさうだが、大に眞面目で、實際の様子に猶更ら呆れて、いろく諫言したが先生なかく聞かない、ぢやア一度その本場所を見せて勝負の説明をしてくれといふ勢ひだ」

「はてな、それから黒田、どうした」

「ところが呵しいよ、その親分の考量が頗る妙だ、こりやア畫工か小説家で、實際の景況を寫したいために來たモンと鑑定したから、幸ひ其夜に開けた賭博場を見せて、

いちく委しく説明したさうだ、すると川上、其後また三度も出て来て、勿論、手は下さないが、また下させもしないが、一所懸命に見て往ったさうだ、しかも現に其親分が川上自筆の名刺を僕に示して、畫工か小説家に斯んな名の人があるかといふ時の事實談だ、そこで考へて見ると、曾て僕に對する前言といひ今こゝに斯の如き事實といひ、どうだ君、川上は待合の亭主となつた僕を捨て、も、僕は川上の賭博師となるを捨て、置く事は出来ないから、この朝寢坊が夜の曉天に車を飛ばして馳せ込んだが、君の拳固騒動で後席は細君その傍を離れず川上また僕を追ひ出すやうな場合、仕方なしに其まゝ空しく歸つたが、今夜ア是非、押し掛けて本音を叩く決心だ、しかし川上のこつたから、何か其間に仔細なくて叶はない筈さ、ねエ上田

「馬鹿野郎、何故そんな事を今まで秘して居つた、貴様一人が知つて居て濟むか」

「だつて君、昨日のやうに拳固を振り廻はされちやア、談説する間も何も」

「貴様は全體、さういふ薄情な奴だ、たとひ横面の一拳や二拳を喰つても乃公の耳に嚙り付いて言ふべきが當然だぞ、しかし今この上田が聞いた以上、もはや貴様が行くに及ばない、待合の亭主より馬鹿でも何でも乃公だ、そもく川上が飄然として故郷の山の奥へ馳せ歸つた時、一片の熱涙を注いで再び都門へ引き出したのは乃公だ、また今の細君に就いての縁の基は乃公だから、由來の事情この上田が捨て、置けない、貴様ア黙つて引ッ込んで、もう酒も飲まない、今、何時だ」

「なるほど、舌よりも涙だ、僕ア差控へて君に任すがね、まだ時間が早いから酒だけ飲んでくれ、川上へは夜が宜からう、いふに及ばないが事情の判るまで君、あの細君に聞かしちやア可哀さうだぜ」

「馬鹿な念を押すな、それくらゐの事は才に於て知らずとも情に於て萬々承知の乃公

だ、さア歸るぞ、もう貴様の家へは來ないから随分、達者で居れ、もし萬々一、まさかとは思つてるが、もし萬々一、あの川上が事實さういふ人間になつた上は、汐入村以來こゝに十餘年來の骨肉に等しい中から待合の亭主と賭博師とを友達に持つた乃公だ、もう世の中も澤山だ、噫と歎ずるより外はない」

其四

世と交り人と接して名聞の巷に馳驅する才はなけれど、また別に我その我を知る自家一個の立脚を占めつゝ、鬼に追はれても悠々たり佛に招かれても悠々たるべき上田力が、あはれ俄に二十貫日の大兵を翻して烏森の水月を飛び出すや否、折しも夕陽に近く道は遠けれど山河百里を軽く心得たる鐵脚に市中の一里二里、車馬の遅きを嘲つて日和下駄の音激しく、たゞ一息に兩國橋まで馳せ歸りし頃は、流るゝ水にうつれる

兩岸櫛比の家々また西日を受けて街頭の點火なほ白く暮るゝに程あり、

このまゝ直ちに川上の許を襲はんか、兎も角家に歸りて夕飯の後にせんかと、橋の袂に思案の歩を停めし折しも、背後より我を呼ぶ聲、おもはず振り返れば吉田雄藏、微笑を含んで會釋もろとも歩み寄りぬ、

「やア吉田か、どこへ行く」

「ちよいと柳島まで用があつて、その歸途に今、貴兄の宅へ寄つたところが、生憎お不在で」

「川上は家に居つたかね、何をして居た、また君は何の用で往つたんだ、今日は日曜でも無いぢやアないか」

「さやう、日曜ぢやア無いんですが、是非お目にかゝりたい用事で、實は法學上に關した材料を持つて行きましたから、その説明かたぐ」

「法學上の材料たア全體どシな事だね、川上から君に頼んだのか」

「それに就いて今、貴兄を訪うた理由ですが、その頼まれた材料が少々、變な事で、勿論、我々の同輩では當然のこつてすが、よほど變ですよ」

「ふむ、何だ、よほど變とは何のこつた」

吉田雄藏おもはず摺り寄つて聲を潜めながら、

「賭博に關するこつてす」

大きくや否、上田の五體は忽ち電氣に打たれたるが如く、兩の拳を固め兩の肩を峙て兩眼ぐるぐると廻して力足に大地を踏む下駄の齒音高く、

「おい吉田、兎も角も乃公の家まで來い」

そのまゝ後も見返らず先に立つて足早の大跨に歩めば、小男の吉田は小跨の刻み足に追ッかけて、家路を急ぐ牛の尾に牧童の従ふが如し、

平生ならば何は儲置き、迎へ出る妻の言葉に答へずとも、我子の笑顔を差覗いて喜ぶべき筈の上田が、その妻子にも目をかけず其まゝ吉田を引いて二階へ驅け上りつゝ、はや暮れ果てし家の内に燈火を呼ぶさへ面倒とや、窓の戸を押し開けて残んの空の薄明りを受けながら、どツかと坐して大息を吹きぬ、

「おい吉田、其、その賭博に關する材料を、どういふ工合に川上から頼んで來た、全體また何時ごろのこつた」

「實は此以前の日曜です、わざわざ郵便で拙者を呼んで、少々必要があるから、そもそも今日の法律上、我國の賭博に關する立法者の精神と、歐米各國に於ける實施と學説と、また内外の比較論から賭博犯罪の統計的に至るまで、凡そ金錢を以て個人が勝敗を争ふ一切の事を調べられるだけ調べてくれとの注文です、勿論、拙者が一人の力で足らないこつてすから、廣く同窓の學友にも質し第一は今、世話になつて

る博士に乞うて及ぶだけの材料を集めろといふ次第で、兎も角この五日間に出来た分を今日、持つて往つたのですが、どうも變な注文ですな」

「は、ア、さうか、して君、今日は大體どんな材料を與へて来た」

「たゞ單に賭博と言つても、注文が注文ですから、なかく以て一朝一夕の容易い業でないです、ところで今日は先づ拙者の學んだ力に依つて得らるゝだけの材料を持つて行きましたが、元來あの頭腦ですから、いちく急所を指摘して質問する點は殆ど門外の人と思へませぬ、また此方で説明したり答辯するに就いても、すぐに會得して了解する工合は實に驚いたほど鋭敏なもので、うかくすると逆倒に遣られますよ」

「なるほど、いや、その邊の事はあるだらう、ぢやア結局、君に材料を集めさすだけで、いまだ何に用ひるといふ段は分らないね」

「そりやア如才なく最初に聞いて見ましたが、たゞ笑つたまゝで、さらに要領を得ませぬ、しかし、たゞ單に賭博といふだけが何となく變に考へますな、しかも其事に就いて金が入りやア幾何でも出すから充分に飽くまで及ぶかぎり力を盡して調べろとの勢ひ、決して一時の好奇心や一朝の用で無く、何か他に大なる用ひどころがありさうですよ」

「や、いづれあるだらう、川上のこつたから、まさか見え透いた馬鹿な事はしまいがさて考へて見ると聊か變だね、いかにも不思議なところがあるわい、しかし君は君で頼まれた事を懇篤に誠實に熱心に着々やるべしだ、僕は僕で別に一種の見を以て其目的の如何を探つて見よう」

「どうか其邊の事は是非とも貴兄に願ひます、實は日夜全力を注いで調べては居るものの、その應用と目的が分りませぬから、いはゆる靴を隔て、痒きを搔くの憾あり

です」

「そりやア、さうだね、ところで談話に實が入り過ぎて、いつの間にか、は、は、は、顔も見えなくなつた、おい清、和女ね、手が空いてりやア燈火を持つて来てくれないか、まッ闇だ」

「何、拙者が點けて來ませう、今あの通り坊の泣聲がしてるから無効ですよ」

「さうか、ぢやア吉田、階下へ降りて夕飯を喰はう、例の如く何も喰ふものは無いが飢を凌ぐに足るさ、御馳走は茶の熱いのと蕃菽味噌の辛いのだ、しかし廚奉行の働きて、どんな美味が不意に飛び出すかも知れないから、そこは君の運次第よ、は、は、は、」

「いや何でも結構です、われ々書生の間は河豚と一般、腹さへ大きく膨して居れば濟む理由で、その代り身體に不相應の兵糧を詰め込みますぜ」

「なアに君、それで宜いんだ、どしく喰つて大に運動すべし、いくら美食しても滋養分を吸ひ取る事が出来なくつて其ま、糞に出す奴が今日の紳士なるものに多いよ、また頻りに衛生々と叫びながら却つて胃の活動を弱くするのが當時いはゆる中等以上の人間に瘦ツ面の青い證據だ、肉類と穀類と其差ありと雖も分量次第で同一の滋養を取れるから、一升飯を快く平けて平氣な身體は一斤の肉を喰つて胃藥を服用する奴よりやア遙に上だ、はッは、はッは、はッは、」

其五

「汐入村以來の出處進退、常に自己が才氣に任して闇雲飛乗の放れ業を仕損じ、また浮世張り抜きの大山を築かんとして失敗さらに失敗を重ねし黒田健次が、糞焼の腹癒せに待合の亭主となりしは其性に於て其理に於て幾何の恕すべきところもあれど、かめ」

深沈持重にして加之も頭腦透明なる川上三吉が、多年の抱負を抱いて新に突貫せんとする社會の第一歩を、何事ぞ酒色の害に勝りて古今もろくの罪惡を構成する賭博の道に踏み入れんとは、狂か狂か、狂にあらすんば人類激變の病魔に襲はれたるか、吉田に聞くとところと黒田がいふところと、その間の事實に於ては黒白の差あれど、その目的に於ては共に一の賭博なり、あゝ川上三吉また竟に狂せるか、されど狂態そのまゝの狂を以て世は彼を棄つるとも我は彼を捨つべからず、身は骨肉にあらすと雖も十有餘年來の彼と我とに於ける、たとひ殺人の大罪を犯して我その累に坐せらるゝとも急に交情を絶つべからず、まして吉田に聞くとところと黒田がいふところと其間に何等かの仔細あり、物は一なれど事は一なれど其間の仔細を窮めずして我いたづらに世人と一般の狂を叫ばるべきや、

一家を照らす吊ランプの下に膳部代用の古机を出して、上田一流の衛生論と滋養説とを饒舌りながら、口中一時に熱すべき蕃菽味噌と叩けば憂として音する干物とを馳走に大茶碗の夕飯したゝか喰ひ終りつゝ、やがて吉田雄藏の立歸るや否、自己また其まま出でんとする體を、濱町河岸の棒杭と呼ばれ汐入村の仙人と笑ひし互の奇縁この良人に伴うて斯妻あり此境涯を脊負うて更に斯良妻ありといふべき例の清女が、睡れる我子を横に抱きながら眉を顰めて、口は輕けれど情は深く聲は癩走れど心は優し、「ねエ良人、今ごろから慌てゝ何處へ、もう七時を過ぎましたよ、また先刻あの吉田さんを連れて歸つて二階へ駈け上つたまゝ、こそくと火も點けずに何を談話して在らしつたの、さうかと思へばまた急に、ばたくと降りて来て、お茶の沸くのも待たずに、さア飯だ飯だと干物を引き摺り出すやら茶碗を轉がすやら、いや箸が足らないの醬油が無いのと良人それでも一家の主人公ですか、ほゝゝゝとりわけ圖

ぬけた大きい身體が小兒のやうに見えますよ外聞の悪い、いつまで昔のまゝの上田流で在らツしやるンです、せめて妻子の手前だけでも御持重なさい、うかくすると妾よりも坊に叱られますよ」

「は、は、は、失敬々々」

「失敬、は、は、は、どういふ聲の調子か知りませんが、よくまア失敬だなぞと、そんな暢氣な事がいはれますねエ、をり／＼呆れて物がいはれませんよ良人には」

「さう和女、いち／＼言葉尻を取って押へて窘めるない、どうせ斯んな奴だよ、まア宜い加減に呼吸を見て氣長く扱ってくれさ、それは兎も角、今夜ア是非これから出るンだ、急に出ざるを得ない理由があつてね」

「理由は聞かなくツても宜う御坐いますから、全體どこへ、行くところだけ仰しやい闇の夜の鐵砲玉も中的が付けば安心しますから」

「は、は、は、鐵砲玉と一般の御取扱ひか、こりやア聊か恐れ入ツた、しかし的は相變らず柳島だ、しかも今夜、事に依ると宿泊ツて来る決心だ」

「いけません、お止しなさい、猶更ら良人いけませんよ、川上さんは兎も角、お可哀さうに今までの濱町に在らしツた時とは違ツて婆や一人を相手の奥さんが、どんなに御迷惑なさいませう、まして良人のやうな無遠慮な、づう／＼しいお察しのない人に宿り込まれて堪りますものか、いくら何でも少しは物の會釋といふ事をお考へなさい、第一この妾が濟みませんよ、夜分のこ／＼と良人のやうな暢氣者を他家へ手放しては、なりません、お止しなさい」

「や、一言なし、由來こゝに眞實お吐りの通りだ、しかしね、今夜ア、どうしても會ツて置かないとならない理由があつて、しかも其用件たるや川上の身に取ツて猶豫すべからざる事だから、是非とも遣ツてくれ、偏に頼む、は、は、は、まるで乃公は

繼子だな」

「をりく、妾が繼母のやうに氣強くなるから、どうか斯うか持つてる世帯ですよ、もし少しでも氣を許して御覽なさい、まさか態とはなさるまいが、寢惚けた拍子に其身體で坊を踏み殺すかも知れませんよ、この手薄い身代ぐらゐは蚊か蚤を潰すやうなもんでせう」

「重ねぐのお言葉いかにも恐れ入るがね、實ア其事に就いて先刻あの吉田とも内々相談したほどの理由で、是非とも今夜、行かないと不可ないから、たとひ和女が怒つても吐つても乃公は行くぞ」

「ほ、ほ、ほ、何ですよ、馬鹿々々しい、よく考へて物を仰しやい、かりにも女房が亭主に怒つたり吐つたり出來ますか、外聞の悪い、良人また川上さんや吉田さんに平生そんな事を言つて在らつしやるんぢやア無いんですか、うちの鼻アは萬事に喧し

くツて蒼蠅くツて乃公を乃公とも思はない女だ、なぞと」

「どうして和女、そんな事實に反した勿體ない事をいふもんか、世間一般は良人あるがための妻だが乃公は妻あるがための良人だと言つて、殆ど和女を頌徳謳歌してゐるさ」

「あれ、そいぢやア良人、外聞の悪い、やはり妾を譽め過ぎて毀つてるやうなもんですよ」

「は、は、は、しかし川上や吉田の前で何を言つたつて宜いさ、ところで今夜は」

「それほど仰しやるなら、行くも宜しいが、あまりお尻を長くしたり其まゝ宿り込んだり、なすつちやア不可ませんよ」

「心得た、きつと早く歸る」

「十一時を過しちやアなりませんよ、妾は夜明しに起きてでも待つて居ますが、先方

で御迷惑なされるから、なるべく早くね、いッそ坊を脊負ッて往らッしやいな」

「は、は、は、とところで川上の妻に何か傳言でも無いかね」

「なくツても其處は良人の臨機應變で、何とか御挨拶するもンですよ、小兒が使用するやうに、いちくソんな事を聞く人がありますか」

「憐れむべし苦學十年の偉丈夫、出でては火事場の焼跡に等しく猶いまだ多少の餘煙あれど、入ッては細君の手前さらに死に損ひの蟻螂が斧を振ふほどの勢ひもなし」

「ほ、ほ、ほ、二十貫目の蟻螂は聞いた事も御坐いませんよ」

「なるほど、こりやア拙劣かつた、乃公の身體を蟻螂たア呵しいわい、さらば細君の手前さらに病牛の尾を振る力もなしといふべきかね、は、は、は、」

「何ですよ良人、戲談を言はずに行くなら早く往ッて早くお歸りなさい、もう八時ですよ」

「や、うかくして遅れた、ぢやア行くから戸を閉めて先へ寢てくれ、歸ッて来て叩くよ、また坊に風でも引かすな、よほど今夜ア寒いぞ」

「かしこまりました」

「さう和女に畏まられると却ッて心苦しいよ、たゞ何となく氣輕に承知してくれ、是また乃公の自ら招くところか、は、は、は、」

家にあッては温雅にして小心なる主人公たり、妻に對うては滑稽にして柔順なる良人たり、最愛の一子に對しては目も鼻もなき子煩悩の父たり、されど一步その門を出づれば流石に多年の苦學難行を踏み來りし上田力、その性に於て當世の名利に馳驅する能はざれど、事に臨んで動かす理を取ッて枉げざるの勇と、満腹の赤心を吐露して知己のために泣くの情とは、汐入村以來こゝに隨一の男、昔ながらの日和下駄からこ

ろと冬の夜の凍れる大地に響かして、さらぬも淋しき本所を斜めに柳島までの間、幾度か吠えられし犬の聲にも見返らず急いで、はや川上が家に近づきし折しも、門より出でて今や車に乗らんとする人影、危し只一步の遅速と走り寄って見れば、主人の川上と思ひの外、例の黒田健次、我より彼まづ言葉をかけて驚きぬ、

「やア上田か、今日は大變に失敬した」

「やア上田か、今日は無事もなだ此奴め、今ごろ此家に何しに來た、今日の晝、きいた事に就いては貴様が來るに及ばない、一切この乃公が引き受けたと言つたぢやアないか、わざわざ待合の亭主野郎が仔細めいて出る場合でない」

「は、は、は、晝間から引き續きの氣焔萬丈なほ當るべからずだね、なアに君、其事ばかりぢやアない、まだ外に少々」

「外の事なら猶ほ以て引ッ込んでろ、第一また例の事も貴様に聞いた事實たア聊か相

違があるらしいぞ、しツかり調べて物を言へ此皮相漢め、もし乃公が外のものなら貴様どうする」

「馬鹿な事を、いくら僕だつて外へ對つて迂濶と饒舌るもんか、しかし上田、不在だぜ川上は、這入つても無効だ」

「不在だから直に歸る乃公でない、今夜ア宿りがけで來たんだ、貴様は此ま、早く歸れ、夜に入つてから人の金を取る職業ぢやアないか」

「おい、上田、宜い加減にしろ、大きな聲で何だ、夜に入つて人の金を取る職業たア、あんまり酷いぜ」

「それに相違ないぢやないかア、お希望とあれば註釋を下してやらうか」

「おい車夫、この男に關はず早く遣れ」

「は、は、は、いよく叶はないと見て遁け出したわい、愉快々々」

黒田が車を飛ばして遁け出せし火影を見送りながら、微笑を含んで悠々と入れれば、門前の聲に其人と知りて迎へ出でし川上の妻女、

「おや、上田さん、よく入らッしやい、門前で今お逢ひなすッたでせう黒田さんに」
 「は、は、は、忽ち一喝を呉れて追ひ歸しました時に川上は不在ださうですが、暫く待つて居ませう、是非とも今夜、ちよいと用があッて」

「さア、何卒、こちらへ、もう今に歸りませうから」

川上が妻女の身を取ッても、黒田の言葉は針を含んで其洒落は薄氣味わるく思へど、上田の言葉は珠玉の如く其滑稽は自然の愛敬ありて加之も呵しく、幸ひ良人の歸家を待つ間の徒然に猶更ら喜んで待遇せば、先生ますます得意の體、

「川上は何時ごろ出ましたね、また何處へ行きました、歸宅の時刻は言ひ置きませんでしたか」

「はい、何とも、たゞ夕方方ふらり出ましたまゝで」

「む、近來、たび／＼出るといふでも無いんですな」

「なアに貴方、わけて夜は斯んな淋しいところで妾と婆やと二人きりですから、めつたに出ません良人ですが、どういふ用か此ごろ、をり／＼、そして少しも行く先をいひませんの、また妾も問ひませんから、さッぱり分りませんが、無論、いつも十二時までには、きッと歸りますよ」

「はてな、そりやア細君、貴女が不可ない、野暮漢の上田がいふまでもなく、なぜ嫉かないんです、大に嫉くべし嫉くべし、妻として良人を嫉くなア當然です、いはゞ情の極です、たとひ川上に何の仔細なくとも、また斷じて妻に怪しまるゝ仔細のあるべき男で無いが、そこは細君、ちよいと面白い嫉きどころですぜ、この上田力、敢て他の圓滿を破らんとするにあらず、實ア聊か嫉いて貰ひたい理由があるからで

それは妾より伺ひたい事ですよ」

「や、これも一理だ、如何にも面白い、なるほど上川だね、いちく門外で出来た其日の事を家の噂に當り散らして喜怒哀樂をうつす人間で無いからなア、しかしまた貴方も偉い、いはゆる今日の生意氣な女學生流に飛び跳ねずして自然の圓滿を無言の間に維持する温雅貞淑、たゞ良人の影を守る點は實に見上げたもんだ、どうも世の中に細君、職權外の事を好む官吏と見て来たやうな嘘をいふ學者と亭主を掻き退けて罷り突ン出る駄女房ほど癪に觸るものはありませんな、は、は、は、」

「上田さん、さう貴方、やたらに一時お世辭の總仕舞をなさると却つて後日お困りですよ、ほ、ほ、ほ、しかし良人が何を致します心算か實は妾も氣にかゝつて居りますから、どうか機會を見て聞いて下さいませんか」

「いや、僕も實ア其事に就いて今夜こゝへ來たんです、しかも至急、聴きたい理由が

あつてね、聴かざるを得ざる所以があつてね、ですから今にも川上が歸つて來りやア、たとひ聊か平生にない顔色に逢つても構はない覺悟で、次第に依れば夜を徹しても退かない決心で、是非、了解したい事があるんです、ついては細君に前以て謝つて置きますが、こりやア上田が徒らに例の無遠慮と無意味に川上の氣色を損ずる理由で無いから、多少その時の場合で聲が大きくなつても安心して居て下さい、宜しいか、第一また貴女は暫時、傍を離れて居て戴きたい、實に細君、あの川上に萬一もし智者の一失でもあると、この上田力は天下また一人の知己なしですよ、あゝ考へると心細い世の中だ」

こゝに至つては上田の天性、おもはず眼中に涙を含みつゝ、何とやら平生にも無き言葉の端々、さては良人に似合はぬ事の過誤でもありしかと、妻女は我を忘れて膝を進めながら、なほも仔細を問はんとする折しも、門の戸を開けて入り來る登音は正しく

歸りし主人の川上三吉、ふと柱時計を見上ぐれば十時を過ぎぬ、あらたに調へんよりはと濱町以來あるにまかして大島紬の書生羽織、太織銘仙の綿入に態とならぬ縮緬の兵兒帶、仔細めかぬ薄茶色の中折帽子、紺足袋に幅廣の木地下駄、赤銅側の時計は鍵のまゝ、殆ど腰の後方に巻いて人には見えざれど、淺黒く苦み走りし面體に一種の光りを含む眼中は自然と其人を現しつゝ、いかな見倒し屋の紙屑買に踏ましても此奴たゞの木偶人で無いといふ顔色、のそりと入り來りて迎へ出でし妻女に首肯きながら、

「誰か來てるやうだね」

「はい、上田さんが」

「むゝ、さうかい」

入り來る川上を見返りて上田は會釋もろとも、今までの居坐を直しつゝ、微笑を含みぬ、

「思ひの外、早く歸つたやうだな、今夜ア少々、話したい事があつて」

「わざくゝ夜、何のこつたね、しかし随分、待たしたらう」

「なアに二時間ばかりさ、よし夜が明けても今夜ア歸らない決心で來たせ、はゝゝゝ、わかるくすると宿り込みの客だ、草臥れてるだらうが君、ちよいと座敷へ、細君は先

へ寢て貰ふさ」

「やア酷い客が押し掛けて來たな、おい芳や和女、茶でも運んでくれ、菓子のない事は先刻お客様が御承知だ、はゝゝゝ、時に上田、今日、夕方、吉田が君の家へ寄り

やアしなかつたかね」

夜を徹しても談すべき事ありと聞くや否、忽ち吉田が立寄りしかと問ひし一言、しかも言下に上田の面體じろりと見遣りし眼光の鋭さ、故意か無意味か、さても電氣の如き頭腦の早い男と今更に驚きぬ、

やがて其まゝ奥の一室に伴ひつゝ、置ランプの下に妻女が運べる茶を飲んで、互に膝と膝とを組むが如くに近寄せながら、儲かくなれば自己が心に猶更ら改つて、今まで思ふ事の十分一も得いはぬ上田力、たゞ川上の顔面のみ見詰めて眞丸の鼻に似たる眼ばかり剥き出し、風に動ける夜着の袖かと疑ふ脣端を尖らしぬ、川上いよく其事と悟りて満面の微笑を浮かべつゝ、組める兩腕を膝に上せたるまゝ脊を丸め聲を潜めて差覗くが如く、しかも言葉は例の單刀直入、

「おい上田、乃公は賭博師にならうと思つてるよ」

上田ますくゝ呆れて只その顔を打守るのみ、川上さらに膝を進めながら、

「上田、泣いてくれるな、泣く前に上川三吉が一言を聞け、聞けとは失敬だが山の上から一眸千里の田野を望むが如き大頭腦で聞いてくれ、また其名の一なるを以て其理のあるところを没し去られちやア困る、ところで上田、今更めて分り切つた事

をいふやうだが、凡そ世の中に人間の棲息するところ人間の關するところ、そもそも利といふものを脱却する事は出来まい、また既に利を知る以上は其利の分配に支配せられざるところと其利の競争に従はざるものは無からう、つまり社會は利のため勝敗を争ふ一の舞臺に設けられたもので、國と國との戦争も同盟も個人と個人の争闘も親睦も人事一般の出來事を詮じ來れば皆これ利のためだ、いふ勿れ人は斯くの如く淺薄卑近なる單純動物にあらずして別に靈魂の作用に於ける高尚遠大の責任と希望とを持するものだ、なるほど、口に饒舌り筆に著して古今の聖賢が叫ぶところは立派だ、いかにも結構だ、さらに間然するところも無いが、さて天下は所謂聖賢の蒼で無い、また全然この社會をあけて神の如く佛の如き宗教家や理の權化に等しい道徳家の棲息地たらしめば、その聖賢たるもの亦これ一個普通の凡俗となる結果で、百年二百年を通じて千萬人中ただ一人あるか無いかの聖賢者が事實に於

て社會一般の凡俗となる理由が無い、ところで世の中は直接間接と有形無形の差別はあるが人間こゝに利といふものを放れて棲息する事は出来無い、つまり社會は普通以上よりも普通以下の多數に依つて運轉されるもので、一人や二人の飛び放れた少數者が聲を濁らして如何に叫ぶとも只その社會の進むべき方角を教へるぐらゐに止つて、やはり事實の物體は多數の凡俗が集合力で運轉してゐるのは、いはゆる利の競争場裡に社會なるものが構成されて居る結果だから、徒らに聖賢者の傳令使となつて本家本元よりも猶更ら及ばない足りない力を盡すの愚を悟ると共に寧ろ多數者の凡俗中に飛び込んで勇氣一番さらに大に働いてやらうと決心したのが君、上田、この川上三吉が賭博師にならんとする所以だ、さア茶でも飲め、これから賭博の人事に貴ぶべく缺くべからざる理由と事實と方法と結果とを語つて、しづかに君の批評を待たう」

時には千萬言を眉目一點の間に宿して默然たる事もあれど、また時には一氣喝破の舌鋒いかにも露骨に大膽に、寧ろ聽く者をして憚るところあらしむるが如き川上の勢ひを、上田は無言の額越に睨みあけたるまゝ、兩腕を組んで座も動かす木像の如し、

「ねエ君、上田、今いふ如き理由で事實は事實に依つて證明さるゝ今日の社會は結局、利の競争だ、ところで利といふものを富といふものに言ひ替へても宜い、富の主意は最も短時間に最も少數の資本と能力とで最も多くの快樂と利益とを得るものとするれば、人間たゞ賭博あるのみだ、單に賭博といへば賽の目を轉したり花札を弄したり其他いろく、在來の下等民が眼前一時の利を争ふための手段に命じた名だが、僕の所謂賭博は道德の反比例として古今もろくの罪惡を醸すの基となり將また白日青天の下になし得ざる賭博で無い、實は立法者の精神から論じて現在の法律を動かした後、官業にするか民業にするかは兎も角、賭博公開の一大市場を設くる所以

だから、なか／＼一朝一夕の仕事で無い、或は僕の生涯に其端緒も覺束ないのみか殆ど悪魔の如く叫ばれ狂者の如く叫ばれて萬口一致の罵倒中に斃死するかも知れないが、また今日社會の趨勢に於ける事實の一方から考へて見ると、案外驚くほどの早い結果を得るかも知れない、といふは君、現に今も賭博公開の一種は歴然と行はれつゝあるからねエ、その看板こそ種々の名稱を付して居るが、實は賭博だ、株式市場といひ米穀取引所といひ其他いろ／＼の銀行會社に於ける抽籤法といひ割増法といひ、いづれか君、賭博の性を帯びざるものやあるだ、今日いはゆる紳士と稱するものが自家の職業外に於て種々の名目上に於て盛に行ふ賭博を許しながら、下層民の文盲者流が寧ろ單純に潔白に簡略に行ふ賭博を追窮して嚴禁する理由が無い、もし其理由ありとすれば多くの犯罪これより生ずるといふ理由で、自己の金錢を以て眼前勝敗の利を争ふといふ點が決して罪となるべき所以で無からう、されば

其方法と組織に依つて賭博その物を祭するよりも賭博の害を禁じて公然これを許すが宜い、また如何なる立法者が出て如何なる完全の法律を設けても利のために生活する人間から賭博の性を除却する事は絶對的の不可能事だ、はゝゝゝ、競争的の動物で富の分配に支配せらるゝ今日の社會だもの、どうしたつて賭博は打つよ、たゞ其公認するに足るべき方法奈何にあるのみだ、一方に淫賣狩をして一方に公然の淫賣を許可せる娼妓のある以上、よろしく政府は金錢直接の眼前より生ずる勝敗損益の一大市場を公開して重税を課すべしだ、穀食民の我農税を軽くして都市公開の賭博税を重くすれば、出す奴に文句も絲瓜も無くて取る政府に面倒も仔細も無い便利至極だ、しかし眼前直接の金錢勝敗所を公開すれば商工業その他一切の必要を阻害するのみか、國家の經濟を紛亂して人心墮落の恐慌ありといふだらうが、大に然らず、僕は寧ろ正反對の意見を持つて居る、その意見と賭博公開に關する一切の組織

方法は半歳の頭腦を費して別に一冊の草稿があるから君、上田、よく讀んで見てくれ、ちよいと簡單に一例をあぐれば、その賭博公開場も上中下の三段に分ち、まづ中の部には今日の所得税を出し得る資格の人間に限って、門前には喧噪を制する巡查を立たせ、また資格の有無を改める受附を設け、場内には銀行の出張所を拵へ一方には政府より検査官の如きものを派出させ、一方には理事とか幹事とかいふ直接支配の取締を置き、その立合の左右から一定せる金銭代用の切符を以て其日々々の一定せる金額の下に一時の勝敗を決するといふやうなもんだ、はゝゝゝその上と下は資格に依って組織方法の點また多少の差ありだ、なかゝ面白いぜ、面白いのみならず深く考へて見れば個人が其日の運命と共に社會經濟上の運轉を激しく敏活にして、いはゆる無意味に固着せる貧富の懸隔を打破する簡略手段だから頗る愉快だ、また學校の生徒とか官吏とか軍人とか乃至一家の主人にあらざるものは一

切これを禁じたり、よし一家の主人にしても其日の市場に入るべき資本が一定の額に達せざるものを禁じたり、いろゝの細則は悉く載せて今いうた一冊の草稿中にあるから、持つて歸って熟讀してくれ、しかも此事たるや川上三吉が生涯に於ける大事業だ、決して一時の快を貪る書生論でもなく一片の不平を洩らす空論でもなく、百折千挫の困難を排して如何なる強敵の包圍攻撃にも屈せず、この生命のあらんかぎり大に眞面目に飽くまで奮勵勇往する決心だ、それに就いて上田、別に差當つての必要もないが参考のため、由來の一六勝負なるものを知らんとして、わざゝある破戸漢の親分へ實地を見に往つたくらるだ、また近くは吉田をして賭博に關する法學者の説を集めしめ、遠く倉橋に書を送つて今日の歐米に流行せる賭博一般を取調べさせ、第一如何にして我意見を世に發表し如何にして事實の進行を謀らんかと日夜の苦心慘澹、はゝゝゝかの黒田めが待合の亭主となつたやうなもんで無

い、つまり萬人が言はんと欲して名を恐るゝために言ふ能はず萬人が行はんと欲して世に斥けらるゝため行ふ能はざるところを、僕が大に叫び大に論じて竟に遂げんとする理由だから、もし幸に志を達して出来た上は僕に感謝して螻蛄の甘味に集るが如き観を呈するだらうが、さて出来るまでは天下の人衆いづれも皆この僕を蛇蝎視して殆ど人外に抛け出すのみか、それ或は不意の奇禍にかゝるかも知れない、しかし覺悟の前だ、およそ何の事業を企てゝも必ず一瀬戸のあるもんだ、まして斯の如き大膽な露骨な丸裸の議論を事實の上に行はんとするには君、どうせ太平無事ぢやア濟まないよ、また翻つて我一身を顧れば、苦學十年の效を銚一文の價値なしと觀じ前途幾何の希望も白癡の放屁一發に如かずと思つて、人事一切の念を斷つや否、故郷の山また山の奥に馳せ歸つて猪猿を相手の生涯を送らんとした僕だもの、實は一度この世の中から捨てゝ仕舞つた川上三吉だ、其奴が再び都門の風塵に出て

車馬喧騒の巷に翩翻たる以上は、徒らに白い飯を喰つて黄色い糞を垂れたつて面白くないさ、また人間一切の趨勢は只これ黄金の資本時代ともいふべき今日の社會に半死半生の病人が呻るやうな世迷言を吐いたつて無効だから、こゝに猛然として件の如き一個の大執着心を持せる大煩惱の大俗物を現出した理由だ、しかし上田、元來この乃公は無用の風月を拜するとも黄金を拜する性でない、まして金錢の勝負事一切は先天的の大嫌ひだ、たとひ志を達して賭博の一大市場を開くとも、その場中には斷じて一步も踏み入れないぜ、わざと踏み入れないンぢやアない、實際に入する事が嫌だから、この間に於ける眞意消息また能く考へて貰ひたい、青樓の主人が奔走して花柳の繁昌を祈るたア違つてるからねエ、はゝゝゝや、うかくと一人で饒舌り過ぎたやうだ、ところで以上に對する批評は君どんなもんだね、大體に斯くの一念、よし如何なる事情に迫つても徹頭徹尾、斷乎として止めないが、

どうせ打出せば百雷の一時に落ち懸るが如く喧しい世評に上るべき筈のものだ、わけて骨肉に等しい君の一言、多年の隔心ない君の一言を聞きたい、また此事に就いては今年の夏ごろ、君に一度、語らうかとも思ッたがね、その時分は未だ考案も薄弱で、實は海とも山とも決心の定まらない理由があつたから、不意に突飛な事を言ひ出して、無用の心配かけちやア、と思ツてよ、ついでに今まで差控へて居ッたのさ、現に必要な材料から學説を集めさして吉田にさへ、まだ事實を打明さないくらるだから君、わるく取ツてくれちやア困るぜ、は、は、は、しかし君も不幸にして大變な友達を持つたもんだ、思へば七年以前、都門を去つて故郷の山の巖蔭に遁け込んだ時、わざと山河二百里を踏んで其大眼から一滴の熱涙を流してくれざア、こんな狂氣が再び世の中へ飛び出さなかつたものを、あ、人事の窮達消長と出處進退は那邊にあるか更に漠として知れないもんだ、しかし上田、こりやア僕が愚癡を

滾すんでない、つまり一場の懷舊談だ、他日、必ず君に感謝するだけの活動はして見せるから、兎も角この意見書と方法組織の細説を載せた草稿を讀んでくれ、徒らに自暴ツ腹の好奇心から出来あがつた大膽業ぢやア無いよ、は、は、は、は、

其六

汐入村以來の逸物、十有餘年來の刎頸、我ためには天下たゞ一人の知己として、由來こゝに兄とも師とも頼める男一人を捨てるか棄てざるかの境、さらに思へば我みづから我を人生の一端より去るか去らざるかの境、あゝと歎じて柳島を立出でし頃は、何時しか夜も更けて見渡す四邊に人影なく、どんよりと曇りし空を仰げば月さへ雨氣を帯びて光なく、ほつと薄墨に銀粉を流せるが如し、おもへば苦學十年の效を抛つて一朝の覺悟に故郷の山へ入りし時、たとひ珠玉を荆棘